島根県内鋳造遺跡の基礎的研究

松尾充晶・角田徳幸・東山信治・勝部智明・渡部麻生

はじめに

島根県古代文化センターでは、平成28年度から県内鋳造遺跡・鋳物師関連資料の基礎的研究を進めてきた。これは島根県に特徴的な手工業品の生産と流通の実態解明を目的とする「考古基礎資料調査研究事業（生産遺跡調査）」の一環である。過去には、たたら製鉄や玉作、窯業といった生産遺跡を基礎研究の対象に取りあげてきた。それを踏まえてテーマ研究事業として重点的に深化させ、さらにその成果を展覧会などで公表するのが基本スキームである。よって本基礎研究は将来的に「島根県の鋳造・鋳物師」の研究を発展させるための下準備に相当するものと言える。

本論はそうした基礎研究成果の一部であり、島根県内で確認されている鋳造遺跡についてまとめたものである。第１表を東山が、第４表を角田が作成し、研究担当者全員による検討・協議のうえ松尾が本文の執筆・編集をおこなった。また尾田瀬Ⅱ遺跡・有ノ木遺跡の出土品実測は担当者全員のほか、一部を飯田周恵（島根大大学院生：当時）が担当した。

第１章．島根県内の鋳造遺跡

まず、これまでに発掘調査で確認されている鋳造遺跡を第１表にまとめた。古代から近世まで銅（青銅などの銅合金全般を含む）の鋳造遺跡が大半を占めるが、中世を中心に鉄の鋳造遺跡も一定数ある。これらは日用煮炊具である鍋釜を主に生産したとみられる。銅鋳物については隠岐国分寺で梵鐘鋳造の事例がある以外ほとんどが、小物製作に使用された小型の坩堝が出土した遺跡である。以下では時期別に概観し、島根県における鋳造遺跡の状況を整理する。

１－１．古墳時代以前の状況

島根県内で鋳造遺跡が出現するのは奈良時代（８世紀）以降であり、飛鳥時代（７世紀）以前の事例は確認されていない。ただし弥生時代の武器形青銅器である中細形銅剣ｃ類は山陰地域を中心に分布しており、同地域で鋳造されたとみられている。同型式の銅剣は荒神谷遺跡で358本、志谷奥遺跡で6本が一括埋納されており、出雲地域で鋳造された可能性も高いが、これを裏付ける資料は今のところ得られていない。

また古墳時代の鋳造製品である銅鏡や鈴杏葉・馬鐸・環鈴など馬具類が古墳副葬品として出土した事例があるが、これらは搬入品であり県内に鋳造に関わる古墳時代の遺跡は存在していない。

１－２．古代の鋳造遺跡

発掘調査事例の多い出雲地域では８世紀に銅鋳物生産が開始し、９世紀にかけて展開することが確認できる。古代では銅製品の需要自体が限定されることもあって、鋳造遺跡の性格は以下のパターンに限られる。（※遺跡名の後の数字は第１表の遺跡番号と対応）

①国府や末端官衙・豪族居宅関連施設といった拠点的消費地に隣接していて、そこへ供給される鍛錬鍛冶や漆工品などと一体となった複合的な手工業品生産の中で銅製品を鋳造しているケース（出雲国府跡(5)、中野清水遺跡(1)など）。

②寺院施設で銅製仏具等を生産しているケース（堤平遺跡(7)）。なお神社関連とみられる鹿蔵山遺跡(6)、青木遺跡(2)は②に類似しつつ、上記①の側面ももつ。

③官衙・集落・生産域とは地理的に離れて単独で立地する、精錬～鍛錬鍛冶に特化した官営的な工房で、付随的に銅鋳物を生産しているケース（寺田Ⅰ遺跡(3)、鉄穴内遺跡(4)、上沢Ⅲ遺跡(8)）

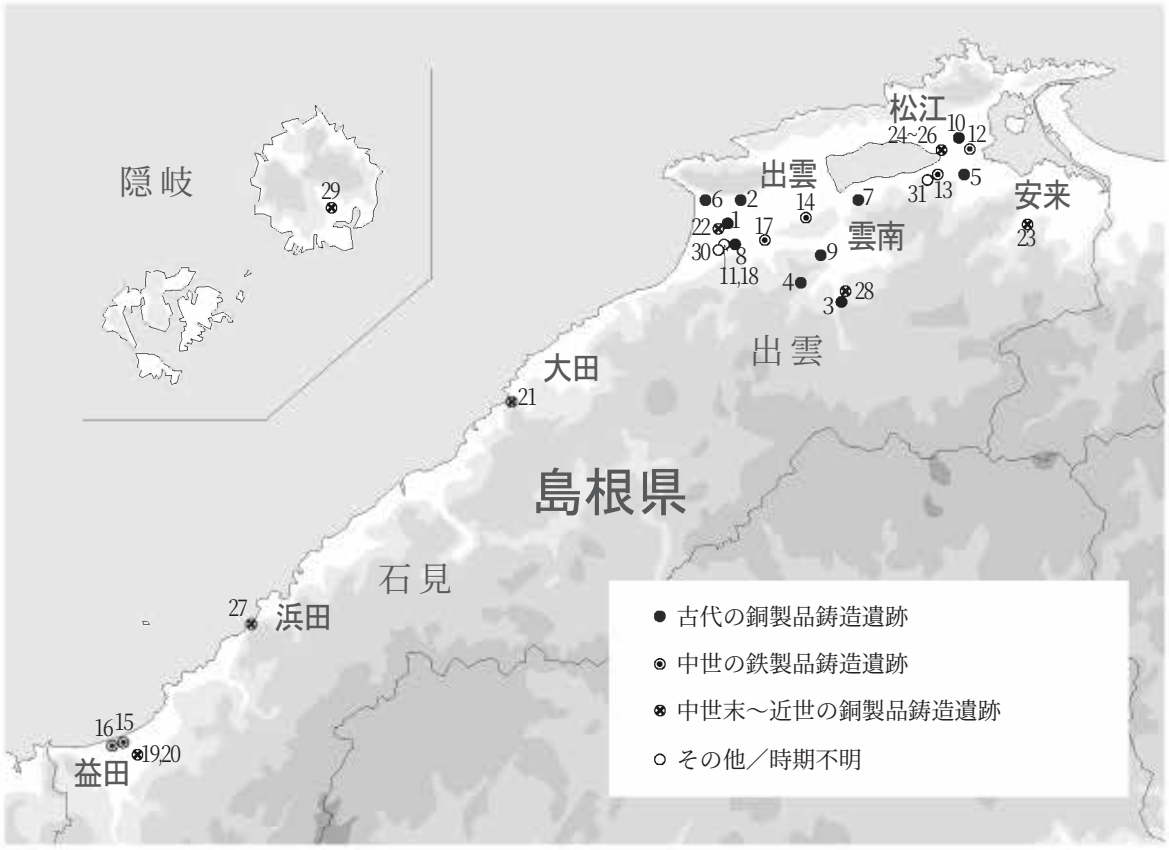
第１表　島根県内の鋳造遺跡

番号	遺跡名	所在地	出土した鋳造関連遺物					原料		時期	遺跡概要	文献
			溶解炉壁	溶解炉羽口	坩堝・取瓶	金属塊銅滴	鋳型	銅	鉄			
1	中野清水遺跡	出雲市中野町				○		●		8世紀～9世紀か	木簡・墨書土器、硯、分銅が出土。鍛冶関連遺物も共伴。銅滴2点（純銅、錫との合金各１）出土。	(1)(2)
2	青木遺跡	出雲市東林木町				○		●		8世紀中頃～9世紀初頭	神社跡とみられ、鍛冶・漆工・木工・紡織など多種の手工業生産がある。	(3)
3	寺田Ⅰ遺跡	雲南市木次町北原			○			●		8世紀後半	多量の鉄素材が集積され鍛冶・鉄製品生産がみられる。	(4)
4	鉄穴内遺跡	雲南市三刀屋町六重			○			●		8世紀中頃～9世紀前半	鍛冶工房3棟、鍛冶炉10基が確認された集約的な精錬～鍛錬鍛冶工房群。	(5)
5	出雲国府跡	松江市大草町	○		○	○		●		8世紀初頭～9世紀前葉	鋳造遺物は国府域に散在しており、必要に応じた単発臨機的生産。銅塊は銅・鉛・砒素・錫の合金。	(6)～(12)
6	鹿蔵山遺跡	出雲市大社町杵築南	○			○		●		8世紀後半～9世紀	出雲神宮司など杵築大社の関連施設か。	(13)
7	堤平遺跡	松江市宍道町白石	○			○		●		8世紀か	丘陵斜面に営まれた村落寺院。	(14)
8	上沢Ⅲ遺跡	出雲市上塩冶町	○					(●)		8世紀～9世紀か	丘陵斜面の鍛冶工房建物付近から、鍛冶遺物に混じって溶解炉壁が出土。	(15)(16)
9	馬場遺跡	雲南市三刀屋町給下			○			(●)		12世紀か	河道2埋土ほかから羽口、厚手の坩堝片が出土。	(17)
10	西川津遺跡	松江市西川津町	○	○				●		平安時代か	包含層から羽口挿入部付近の溶解炉壁と羽口、滓が出土。	(18)
11	三田谷Ⅰ遺跡	出雲市上塩冶町			○			※金		～中世	金を溶解した坩堝片が出土。	(19)
12	山辺遺跡	松江市西尾町	◎	◎					●	12世紀～13世紀前半	丘陵裾の工房建物付近から甑炉の破片が多数出土。	(20)
13	有ノ木遺跡	松江市玉湯町林村	◎	◎			○		●	12世紀～13世紀頃か	鉄鍋・釜の鋳型と溶解炉壁が出土。本書第２章で再検討。	(21)
14	尾田瀬Ⅱ遺跡	出雲市斐川町神庭	◎						●	中世	溶解炉壁が出土。本書第２章で再検討。	(22)
15	沖手遺跡	益田市久城町	◎	◎			○		●	中世	炉跡、土坑	(23)(24)
16	中須西原遺跡	益田市中須町	○						(●)	15世紀後半～16世紀	港湾集落に集中する鍛冶工房群にともなって鋳物を生産。	(25)
17	クボ山遺跡	出雲市船津町	◎	◎					●		報告書では近世以降と推定されるが根拠なく、中世の可能性もあり。	(26)
18	大井谷Ⅱ遺跡	出雲市上塩冶町			○			(●)		13世紀～15世紀	山林に営まれた寺院跡で、香炉・燭台・花瓶が共伴する。溝遺構から坩堝（取瓶？）１点出土。	(27)
19	七尾城跡	益田市七尾町			○	○		(●)		16世紀か	16世紀後半に整備された本丸門の整地層下から炉跡とともに小型の坩堝が出土。鍛冶滓もあり。	(28)
20	三宅御土居跡	益田市三宅町			○			●		16世紀か	御土居最終段階の鍛冶工房SB301に伴うか。小型の坩堝・取瓶２点出土。	(29)
21	古龍遺跡	大田市温泉津町湯里			○			●		16世紀後半	試掘確認トレンチから坩堝２点出土。	(30)
22	余小路遺跡	出雲市松寄下町				○		●		16世紀後半～17世紀前半	半溶融した銅銭10枚、銅精錬滓が出土。	(31)
23	冨田川河床遺跡	安来市広瀬町			○			(●)		17世紀前半か	坩堝とその蓋が出土。真鍮（黄銅）熔解に使用したものあり。その他に溶解炉もあるか、詳細要検討。	(31)～(35)
24	松江城下町遺跡（殿町279番地外）	松江市殿町			○			●		17世紀初頭（～前半）	銅・鉛・錫が付着した小型の坩堝が出土。城下形成初期の堀尾采女屋敷跡。	(36)
25	松江城下町遺跡（母衣町68）	松江市母衣町			○			(●)		17世紀前半	武家屋敷エリアの城下形成初期遺構面から坩堝１点出土。	(37)
26	松江城下町遺跡（第9・10ブロック）	松江市米子町			◎			●		17世紀	外堀沿いの町屋ブロックから小型の坩堝がまとまって出土。銅と真鍮、白金鋳造か。	(38)
27	山陰道荒磯谷地区	浜田市西村町			○				●	近世	近世山陰道推定地。街道に面した工房か。銹化鉄が固着した坩堝出土。	(39)
28	谷口遺跡	雲南市木次町北原			○			●	●	近世	坩堝が多量に出土。精錬～鍛錬鍛冶が共伴。鉄と黄銅ほか鋳造か。	(40)(41)
29	隠岐国分寺跡	隠岐の島町池田	◎	○			○	●		(17世紀～)18世紀	梵鐘鋳造坑。鋳型は梵鐘以外の小型品も含む。埋土から18世紀後半の磁器出土。	(42)
30	古志本郷遺跡	出雲市古志町			○			(●)		不明	弥生～近世の包含層から坩堝２点出土。	(43)
31	面白谷遺跡	松江市玉湯町湯町				○		●		不明近世以前か	鋳造素材とみられる円板状銅塊の破片。鉱石由来の銀を含有し南蛮絞り導入以前のものと推定。	(44)

【第１表出典文献】

(1)島根県教育委員会2005『中野清水遺跡(2)』／(2)島根県教育委員会2006『中野清水遺跡(3)・白枝本郷遺跡』／(3)島根県教育委員会2006『青木遺跡Ⅱ（弥生～平安時代編）』／(4)雲南市教育委員会2007『ゴマボリ遺跡・寺田Ⅰ遺跡』／(5)島根県教育委員会2009『六重城南遺跡・瀧坂遺跡・鉄穴内遺跡』／(6)島根県教育委員会2003『史跡出雲国府跡－１－』／(7)島根県教育委員会2004『史跡出雲国府跡－２－』／(8)島根県教育委員会2006『史跡出雲国府跡－４－』／(9)島根県教育委員会2008『史跡出雲国府跡－５－』／(10)島根県教育委員会2013『史跡出雲国府跡－８－』／(11)島根県教育委員会2013『史跡出雲国府跡－９　総括編－』／(12)島根県教育委員会2019『史跡出雲国府跡－10－』(13)大社町教育委員会2005『鹿蔵山遺跡』／(14)島根県教育委員会2002『堤平遺跡』／(15)島根県教育委員会2001『蟹谷遺跡・上沢Ⅲ遺跡・古志本郷遺跡Ⅲ』／(16)島根県教育委員会2002『古志本郷遺跡Ⅳ・放れ山横穴墓群・只谷間府・上沢Ⅲ遺跡（分析編）』／(17)島根県教育委員会2001『馬場遺跡発掘調査報告書』／(18)島根県教育委員会2001『西川津遺跡Ⅷ』／(19)島根県教育委員会1999『三田谷Ⅰ遺跡（Vol.1）』／(20)島根県教育委員会2011『山辺遺跡・鞍切遺跡・米坂古墳群・貝先遺跡ほか』／(21)玉湯町教育委員会1997『別所地区地すべり関連区画整理事業に伴う有ノ木遺跡発掘調査報告書』／(22)斐川町教育委員会1999『荒神谷史跡公園整備に伴う尾田瀬II・西谷II・西谷遺跡発掘調査報告書』／(23)島根県教育委員会2008『沖手遺跡・専光寺脇遺跡』／(24)益田市教育委員会2010『沖手遺跡・久城東遺跡』／(25)東山信治2017「益田市中須西原遺跡の鉄関連遺物について」『古代文化研究』第25号、島根県古代文化センター／(26)島根県教育委員会2005『畑ノ

前遺跡・菅原Ⅰ遺跡・クボ山遺跡・菅原Ⅱ遺跡・菅原Ⅲ遺跡・廻田Ⅴ遺跡・保知石遺跡・浅柄Ⅱ遺跡・柳ノ内Ⅰ遺跡』／㉗出雲市教育委員会2001『斐伊川放水路建設予定地内発掘調査報告書Ⅲ　大井谷Ⅰ遺跡・大井谷Ⅱ遺跡』／㉘益田市教育委員会1998『七尾城跡・三宅御土居跡－益田市関連遺跡群発掘調査報告書－』／㉙益田市教育委員会2002『沖田七尾線街路整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査　三宅御土居跡』／㉚目次謙一・渡辺正巳2017「古龍遺跡発掘調査報告」『石見銀山遺跡テーマ別調査研究報告書２』島根県教育委員会・大田市教育委員会／㉛島根県教育委員会2007『余小路遺跡・小畑遺跡』／㉜島根県教育委員会1983『富田川河床遺跡発掘調査報告書－Ⅲ－』／㉝島根県教育委員会1984『富田川　同報告書⑷』／㉞広瀬町教育委員会1988『－飯梨川中小河川改修事業に伴う－富田川河床遺跡発掘調査概報』／㉟上山晶子「富田川河床遺跡出土金属生産関連遺物の蛍光X線分析結果」『島根県教育庁埋蔵文化財調査センター年報27－平成30年度－』／㊱松江市教育委員会2011『松江歴史館整備事業　松江城下町遺跡（殿町287番地）・（殿町279番地外）発掘調査報告書』／㊲松江市教育委員会2015『松江城下町遺跡（母衣町68）』／㊳松江市教育委員会2014『松江城下町遺跡第1ブロック（東側）・第6～10ブロック・第12ブロック』／㊴島根県教育委員会2011『近世山陰道推定地（力石地区・荒磯谷地区・原地区・カモト地区）・片良ヶ平遺跡・馬ノ太郎遺跡・北ヶ迫遺跡』／㊵雲南市教育委員会2003『家ノ前鈩跡・谷口遺跡・宮サコ遺跡』／㊶雲南市教育委員会2004『家ノ前鈩跡・谷口遺跡・宮サコ遺跡（付編）』／㊷隠岐の島町教育委員会2016『隠岐国分寺埋蔵文化財調査報告書』／㊸島根県教育委員会2001『古志本郷遺跡Ⅱ』／㊹島根県教育委員会2006『県道浜乃木湯町線（湯町甲区）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』



第１図　鋳造遺跡の位置

個々の遺跡の生産規模は小さい（関連遺物の出土量が少ない）が、その一方で遺跡数は多い。官衙、寺院周辺で急増した銅製品の需要に対応するために、８～９世紀にはそれぞれの消費地付近で個別操業的な銅鋳物生産が拡散したとみられる。個々の規模は小さく必要に応じた臨機的生産とみられ、専業的な連続操業はうかがえない。

古代の鋳銅遺跡についての上記事項は全国的な傾向といえるが、鹿蔵山遺跡（出雲神宮司）や青木遺跡（美談社・伊努社等）のような神社関連遺跡に伴う事例があるのは出雲の特性といえる。

この時期の溶解炉は直径18㎝程度（上沢Ⅲ遺跡例：第２図１）と小型であったとみられるが炉の全体構造が分かる事例はない。炉壁が出土せず羽口で送風

し坩堝で熔解したと想定される事例が大半である。鋳型の出土例が無いため製品内容は不明であるが、一般的には銅製装身具や建築金具、仏具など小型品を生産していたことが想定される。

なお島根県内では古代の鉄鋳物生産遺跡は確認されていない。当地は砂鉄原料による鉄産地域であり、鋳物の素材となる炭素量の多い銑鉄も一定量得られていたとみられるが、それらは脱炭処理により鍛造素材にされたとみられる。前記ケース③のような鉄・鉄器生産に専従する工房であってさえ、銅鋳物は作るが鉄鋳物は扱わない。これは奇異にも思えるが、実際のところは全国的にみても古代に鉄鋳物と銅鋳物の両者を同時に生産していた工房は皆無であることが指摘されており(1)、それぞれは別の生産体系にあったとされる。今のところ、鉄の鋳造技術を受容したことを示す古代の資料は島根県内にはない。

１－３．古代鋳造遺跡の特記事項

古代の鋳造遺跡は前記の①②③に大別でき、個別遺跡の概要は第１表の欄に記載しているが、参考までに特記事項を述べておく。

出雲国府跡(5)では坩堝（・取瓶）（第２図５）と、素材原料とみられる銅塊（銅・鉛・砒素・錫の合金）や銅滴、銅線が出土している。国府の存続期（７世紀末～12世紀）という長期にわたって鍛錬鍛冶などの金工関連資料はみられるようだが、鋳造関連資料は８世紀初頭～９世紀前葉にまとまっている。広い国府域のなかで出土エリアが集中することはなく散在的で、必要に応じておこなわれる単発臨機的な鋳造が想定される。堤平遺跡(7)は丘陵中腹に営まれた瓦を葺かない村落寺院で、寺院に特徴的な灯明皿形・鉄鉢形須恵器が多数出土している他、銅製容器の破片もある。鹿蔵山遺跡(6)は出雲大社の南方800ｍの砂丘台地上にあり、墨書土器や、三彩多口瓶や金装帯金具などの高質な出土品から出雲神宮司など杵築大社の関連施設が付近にあったと推定される。包含層から少量出土。上沢Ⅲ遺跡(8)では溶解炉の炉壁破片が出土している。炉基底部にあたる資料（報告書図19－１）の形状から、基部外径18㎝前後となる炉の平面形が復元図示されている。断片的な資料であり評価が難しいが、鍛冶炉を伴う８～９世紀の鍛錬鍛冶工房建物（SB01）の覆土中から鍛冶滓や羽口等と混在して出土している点を最大限評価すれば、８～９世紀の鋳造溶解炉が付近に存在していた可能性が高い(2)。炉壁の金属学的分析では鉄・銅どちらを扱ったか不明とされ断定できないが、この工房跡では漆パレットとして使用された須恵器皿が出土しており、漆工と一体的な銅鋳物生産がおこなわれた可能性も想定できる。鉄（鍛造）製品に加えて鋳銅製品＋漆工といった複合的な金属器生産工房であること、転用硯が出土していて郡衙等公的機能の関与がうかがえることは前記③のケースに共通する要素である。

１－４．中世前半の鋳造遺跡

平安後期から鎌倉時代（13世紀）は国内での銅生産自体が衰微するとともに、銅鋳物の生産が沈滞することが知られている(3)。こうした全国的な動向と同調するように、島根県内の鋳銅関連資料も10世紀に激減する。国内では14世紀以降、長登銅山等でふたたび銅の製錬が活発化し全国的に銅鋳物の生産も増加するが、島根県内では中世末まで低調なままであり、15世紀以前の鋳銅遺跡は大井谷Ⅱ遺跡(18)に限られ非常に少ない。

一方、鉄鋳物に関しては、12世紀頃に県内で生産が開始され、中世を通じて操業された可能性が高い。一般的には、地域的差異をもちつつも12～13世紀には畿内を離れた地方に鋳造遺跡が展開し、中世的な鉄鋳物の生産が確立するとされる。島根県内の遺跡では時期を特定できるものが少ないが、山辺遺跡(12)が12～13世紀前半とみられるほか、次章で詳述する有ノ木遺跡(13)は中世前半の可能性が高い。また尾田瀬Ⅱ遺跡(14)、クボ山遺跡(17)も中世の鋳鉄遺跡の可能性が高い。これらの遺跡は山深い山間部ではなく村近くに立地しつつも、集落域から少し距離を隔てた谷奥斜面に立地するといった特徴があり、製鉄・鍛冶・鋳物を扱う専業的冶金工房の成立をうかがわせる。

このうち工房の構造を最も良く残すのは山辺遺跡の例である。ここでは鋳造工房跡とみられる斜面加

工段に近接する廃棄土坑（SK01）から溶解炉壁が多数出土した。工房内には炉跡とみられる強く被熱硬化した円形のくぼみ（SK07、直径約80㎝）と、鋳込みに関わる可能性のあるくぼみ（SK06、直径約100㎝）が検出されている。溶解炉は3段に分割される円筒形の甑（こしき）炉と想定され、最下段が直径40㎝前後に復元できる（第２図２）。なお上記の廃棄土坑からは椀形鍛冶滓も出土していて周辺で精錬鍛冶もおこなわれていた。

山辺遺跡からは製品を示す鋳型が出土していないが、12〜13世紀に県内で展開する鋳鉄遺跡は鉄鍋・釜を中心に鋳造していた可能性が高く、次章で詳説する有ノ木遺跡でも鉄鍋の鋳型が確認されている。また、隣接する鳥取県では、円護寺坂ノ下遺跡（鳥取市円護寺）[4]で11世紀後半頃と推定される溶解炉と鉄鍋鋳型がまとまって出土している（第２図３・10）。これらのことから、全国的に中世的な鋳物生産が開始される12世紀から遅れることなく、山陰でも鉄鍋を中心とした鉄鋳物生産が始まったことが確認できる。民衆の日用的な煮炊き具として鉄製の鍋が広く普及すると同時に、地域内での鋳造生産が展開していたことを読み取れる。

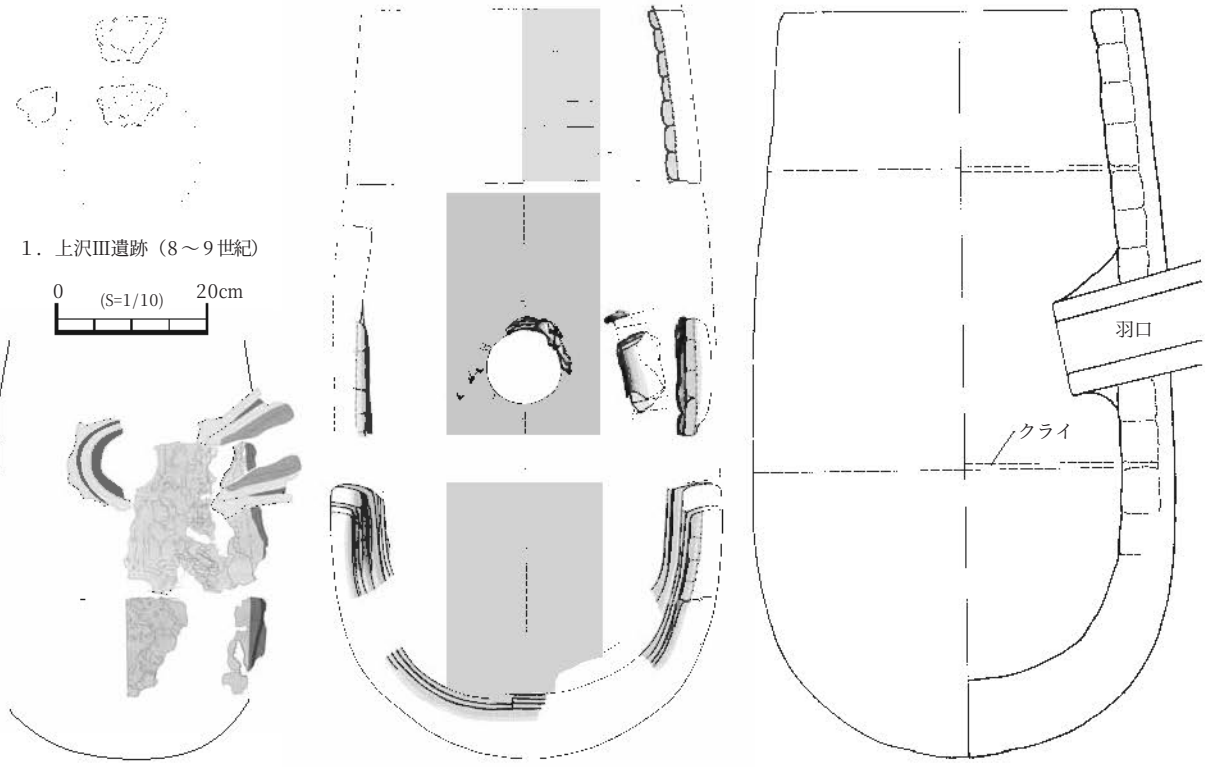
溶解炉の構造と規模についてみると、籾殻などの混和材を多く含む胎土で略円筒形の炉を構築する基本構造は８〜９世紀の上沢Ⅲ遺跡から認められる。同遺跡の溶解炉は鋳銅用で、基部の外径18㎝と小型のものである（第２図１）。12世紀頃には、鉢状の最下段（基底部）の上に円筒状の炉体を積み３段に分割式とし、つなぎ目を粘土（クライ）で接続する、いわゆる甑炉タイプが出現する。中世前半では山辺遺跡で基底部経40㎝ほど（第２図２）、円護寺坂ノ下遺跡で推定高さ100㎝程度、底部の最大径51.4㎝、上部がわずかに内傾し、中段下位に内径10㎝ほどの羽口が装着される溶解炉（第２図３）が確認されている。これ以降の溶解炉は18世紀後半とみられる隠岐国分寺の梵鐘鋳造に伴う溶解炉（第２図４）の事例がある。

１－５．中世後半・戦国期〜近世初頭の鋳造遺跡

中世後半から近世初頭、特に16世紀から17世紀にかけて鋳造遺跡が増加する。特に顕著なのは中世城館を核とした益田氏関連遺跡群や、広瀬富田城・松江城の城下町といった立地での、小型坩堝を用いた銅小物の鋳造である。作事普請や調度類の錺金具といった銅鋳物需要に対応するため、多種の手工業とともに鋳物生産が大消費地近くに組み込まれていることが見て取れる。

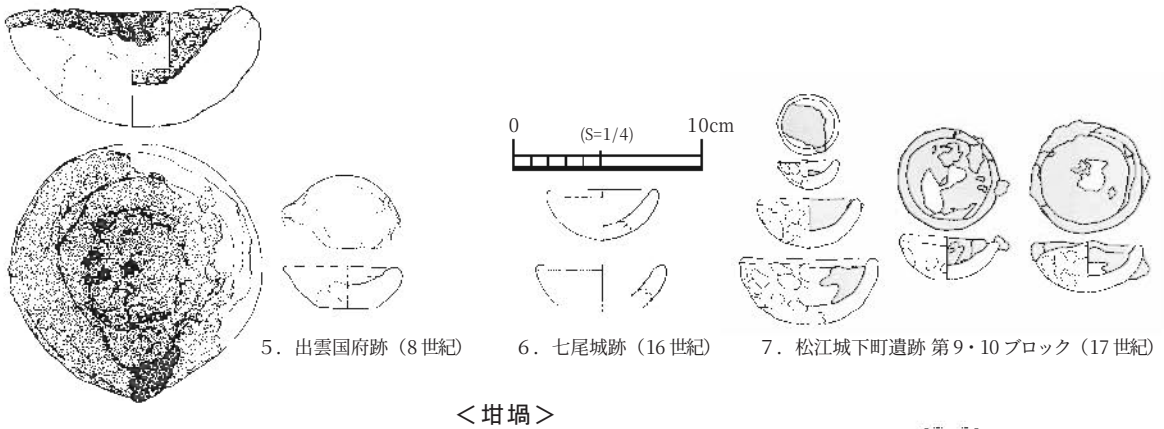
このうち石見の益田地域は領主益田氏が政治的安定のもとで日本海交易を進め経済的・文化的繁栄を遂げた中世都市であり、多種の生産遺跡とともに15〜16世紀の鋳造遺跡が確認できる。益田氏城館跡の七尾城⑲・三宅御土居跡⑳で銅小物を鋳造していたほか（第２図６）、益田川河口部に展開した港湾集落の沖手遺跡⑮と中須西原遺跡⑯では鉄鋳物を生産していた。沖手遺跡では鋳造工房とみられる建物跡（10区建物122）に伴って、溶解炉の据え跡（SX04）や鋳込み作業土坑（SK01）が確認されている。溶解炉は直径１m超の樽形を呈した甑炉と報告されており、その数値はともかくかなり大型のものである。また中須西原・東原遺跡では合計34基の鍛冶炉が検出され、湊町の一部に鍛冶職を集中させたエリアとみられているが、鍛冶関連遺物が多量に出土している中に１点だけ溶解炉下部付近の破片が含まれていた。単発的に鉄鋳物の鋳造もおこなっていたとみられる。これらの遺跡の製品内容は不明であるが、日用品としての鉄製鍋釜が主体であったと推察される。参考に近い時期である鳥取県の三部古城山遺跡（鳥取県西伯郡伯耆町）[5]を見ると、15世紀後半〜17世紀初頭の鋳造工房で大量の鉄鍋を生産していたことがうかがえるほか、茶釜、梵鐘の鋳型も確認されており、鉄・銅両方の鋳造をおこなっていた。工房は中世城郭の直下にあたる谷に位置しており、鋳物の生産・販売に国人領主層が庇護者として関与していた可能性が指摘されている。広い意味では益田川河口部での鋳物生産も領主益田氏が掌握する社会経済活動に統属しており、中世の鋳物が村落自給の範囲を超えた物資集散、生産・流通活動の中にあったことをうかがえる。

また松江城下町遺跡（24〜26）では城下町形成初



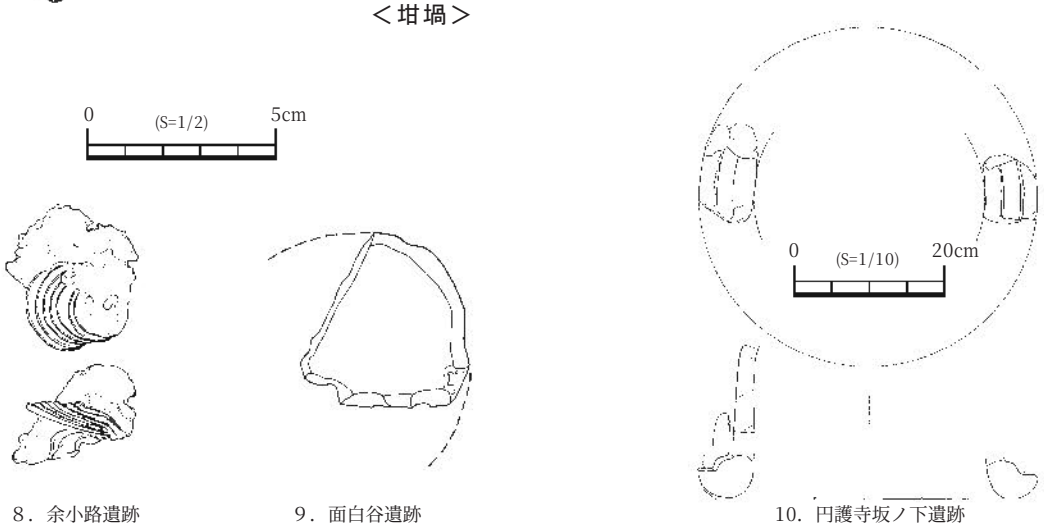
1．上沢Ⅲ遺跡（8～9世紀）
2．山辺遺跡（12～13世紀前半）
3．円護寺坂ノ下遺跡（11世紀後半）
4．隠岐国分寺（18世紀後半）

＜溶解炉＞



5．出雲国府跡（8世紀）
6．七尾城跡（16世紀）
7．松江城下町遺跡 第9・10ブロック（17世紀）

＜坩堝＞



8．余小路遺跡
9．面白谷遺跡
10．円護寺坂ノ下遺跡

＜銅素材＞
＜鉄鍋鋳型＞

第2図　主要な鋳造関連資料

期にあたる17世紀前半の鋳銅用坩堝の出土が顕著で、家老等の上級藩士屋敷跡（殿町279番地外）では普請に伴う可能性のある坩堝が出土している。また第９・10ブロックでは大工道具や獣骨製小物・鍛錬鍛冶・漆工といった様々な手工業生産に関わる資料が出土しており、外堀に近い町屋エリアに職人町が形成されていたことが推定されている。そこからは銅および真鍮などの合金鋳物による小物細工がおこなわれていたことを示す坩堝（第２図７）が出土しており、様々な素材を組み合わせた調度道具類に必要とされた鋳物を必要に応じて鋳造していたとみられる。

鋳造原料としての銅素材は面白谷遺跡(31)でインゴットとみられる円板状の銅塊（第２図９）があるほか（ただし時期不明）、余小路遺跡(22)では中国製銭貨を地金にしたことを示す半溶融状態の銅銭10枚が出土している点が注目される。中世末の根城跡（青森県八戸市）でも同様に半溶融の永楽通宝10枚が出土しており(6)、銅銭を鋳物材料として利用することは広く行われていたと推定されている。

１―６．近世鋳物の展開

近世では城下町などで銅小物などの小規模な鋳造がうかがえるものの、18世紀以降はそのような遺跡も見られなくなる。坩堝を用いた小規模な鋳造は各地で継続しておこなわれていると想定されるが、見た目上は鋳造遺跡が消滅する。その背景には松江藩釜甑方による藩営専売や、鋳造に関する権利の占有を認められた鋳物師職による拠点的鋳造生産があったとみられる。島根県内では出雲の宇波村（安来市広瀬町）・小竹村（安来市伯太町）、石見の市山村（江津市桜江町）・川本村（邑智郡川本町）・高角（益田市高津）・中之嶋村（益田市中島町）に鋳物師がいたことが知られる。このうち宇波鋳物師による作品として現存するのは天正３（1575）年造の迎接寺（松江市八幡町）の銅鐘と出雲大社の銅鳥居、また本書で詳論する巌倉寺（安来市広瀬町）の鉄灯籠が古い時期のもので、こうした鋳物師は近世近代を通じて多くの鉄・銅鋳物を鋳造した。また近世には大田市から江津市の臨海部で鋳鉄素材である銑鉄に特化したたたら製鉄がおこなわれた。石見沿岸部で生産される銑鉄は「石見銑」として鋳物用の材料として流通し、鉄の主要な市場であった大坂では鋳物師から高く評価されていた。このような近世の鉄と鋳物の生産・流通に関してはさらに研究の深化が必要であろう。

なお近世の鋳造事例としては、離島である隠岐地域で隠岐国分寺(29)の例がある。梵鐘を鋳込むために地面を掘り込んだいわゆる鋳造土坑とみられる遺構内から、廃棄された溶解炉と鋳型片が出土している。本堂に近接した境内中心部に位置しており、棟札から推定される延宝４（1676）年・享保４（1719）年・安永３（1774）年のいずれかの本堂再建に伴って梵鐘が鋳造されたと推定されている。隠岐国分寺は近世の事例であるが、一般に中世の梵鐘鋳造遺跡には寺院境内地に立地するものがよくみられ、これが需要者の近辺に鋳物師が出向いて製作する「出吹き」と呼ばれる形態であったと考えられる。島根県内での調査事例は無いが、鳥取県の霞の要害跡（日野郡日南町／15世紀前半～16世紀中葉）(7)では梵鐘鋳造土坑と鋳型類が出土しており、その竜頭および撞座の特徴から、清水寺(島根県安来市)蔵の梵鐘と共通の原型を用いて鋳型が作られたと推定されている。清水寺梵鐘は銘より応永28（1421）年に「和州大工友光」の作であることが明らかであり、両例はいずれも大和の鋳物師による地方寺院への出吹きの実例と評価される。良く知られる河内鋳物師をはじめとする大鋳物師地域の職工による当地での活動の展開についても、今後の重要な研究課題のひとつである。

第２章．中世鋳造遺跡の再検討

前章では、刊行されている発掘調査報告書の記載に基づいて、島根県内で確認されている鋳造遺跡の全体像を概観した。このうち溶解炉壁などが一定量出土している有ノ木遺跡（松江市玉湯町林村別所）と尾田瀬Ⅱ遺跡（出雲市斐川町神庭）については、出土品をあらためて検討することにより、遺物構成や操業内容についてさらに理解が深まることが想定された。そこで所有者（保管機関）である松江市ま

ちづくり文化財課（松江市立出雲玉作資料館）、出雲市文化財課（荒神谷博物館）のご理解・ご協力を得て、関連遺物の再検討を試みた。

両遺跡ともに、出土した鋳造関連遺物は保管されている全量を閲覧したうえで、必要な資料を借用して島根県埋蔵文化財調査センターに移送し、研究担当者全員で観察をおこなった。溶解炉壁や鋳型といった遺物種別ごとに残存情報の多い資料を抽出し、出土品の全体像を過不足なく表現できるよう留意しながら構成図を作成し、個別の実測・写真撮影等の記録作業をおこなった。以下、遺跡の概要と、今回の再検討により得られた所見を述べる。

２－１.有ノ木遺跡

遺跡の位置　有ノ木遺跡は宍道湖南岸の松江市玉湯町林村別所に所在する。宍道湖から本郷川沿いの谷を南に２㎞ほど入った谷奥部の、ごく緩やかに傾斜する北向きの丘陵裾部に位置しており、標高約70m。現状は段状の水田で、圃場整備に伴って平成８年に玉湯町教育委員会により発掘調査がおこなわれた(8)。鋳造に関わる遺構はなく、廃棄された炉壁等と炭化物が二次的に堆積した包含層とみられる。

出土品の保管状況と検討対象　出土品は水洗され丁寧にコンテナに仕分けした状態で出雲玉作資料館収蔵庫（花仙荘）に収蔵されている。まず平成29年６月に全体像を把握するための資料閲覧をさせていただき、さらに同７月、良好な資料が収納されるコンテナ20箱を選択して借用した。そのうち１箱は有ノ木遺跡が所在する別所地区で個人（渡部佳男氏）により採集され同資料館に寄贈されたものである。状況から有ノ木遺跡出土品と同一の溶解炉に由来するものと見て良く、今回まとめて扱った。出土品は発掘調査に伴う整理作業の際に、種別や残存度で仕分けされていたため、ほとんど情報をとどめない炉壁小片がまとめられたコンテナなどは借用せず今回の検討対象としていない。なお資料の閲覧・借用にあたっては、出雲玉作資料館館長片岡詩子氏、同館森重京子氏・金森みのり氏、松江市まちづくり文化財課学芸員三宅和子氏に格別のご協力をいただいた。厚く御礼申し上げる。

鋳造関連遺物の内容　有ノ木遺跡出土の鋳造関連遺物の全体像を示す代表資料40点を抽出し、第３図にその構成を掲げた。大きくは溶解炉炉壁、炉底塊・鉄塊系遺物、鋳型に大別される。三叉状土製品など鋳造遺跡に特徴的な資料はみられなかった。個別資料の特徴所見は第2表に記載しており詳説しないが、溶解炉下部の炉壁内面に薄く張り付いた銑鉄が錆化していることと、鍋鋳型および釜の可能性をもつ鋳型片が出土していることから、有ノ木遺跡では鉄鍋類を鋳造していたことがわかる。銅を扱った痕跡は認められなかった。

以下、炉の形態や操業内容について特徴を述べる。

溶解炉は籾殻を混和材として多く練り込んだブロック状の粘土を積み上げたもので、形状をうかがわせる良好な資料が少ないが丸底円筒形の一般的な溶解炉とみて矛盾ない。炉壁積み上げの接合面を残す資料が認められるが、３段構造の甑炉の接合部目地を埋めるいわゆるクライのような造作は認められない。炉の内壁には粘土の貼り足しによる補修痕が多くみられ、鋳造作業の繰り返しを示している。

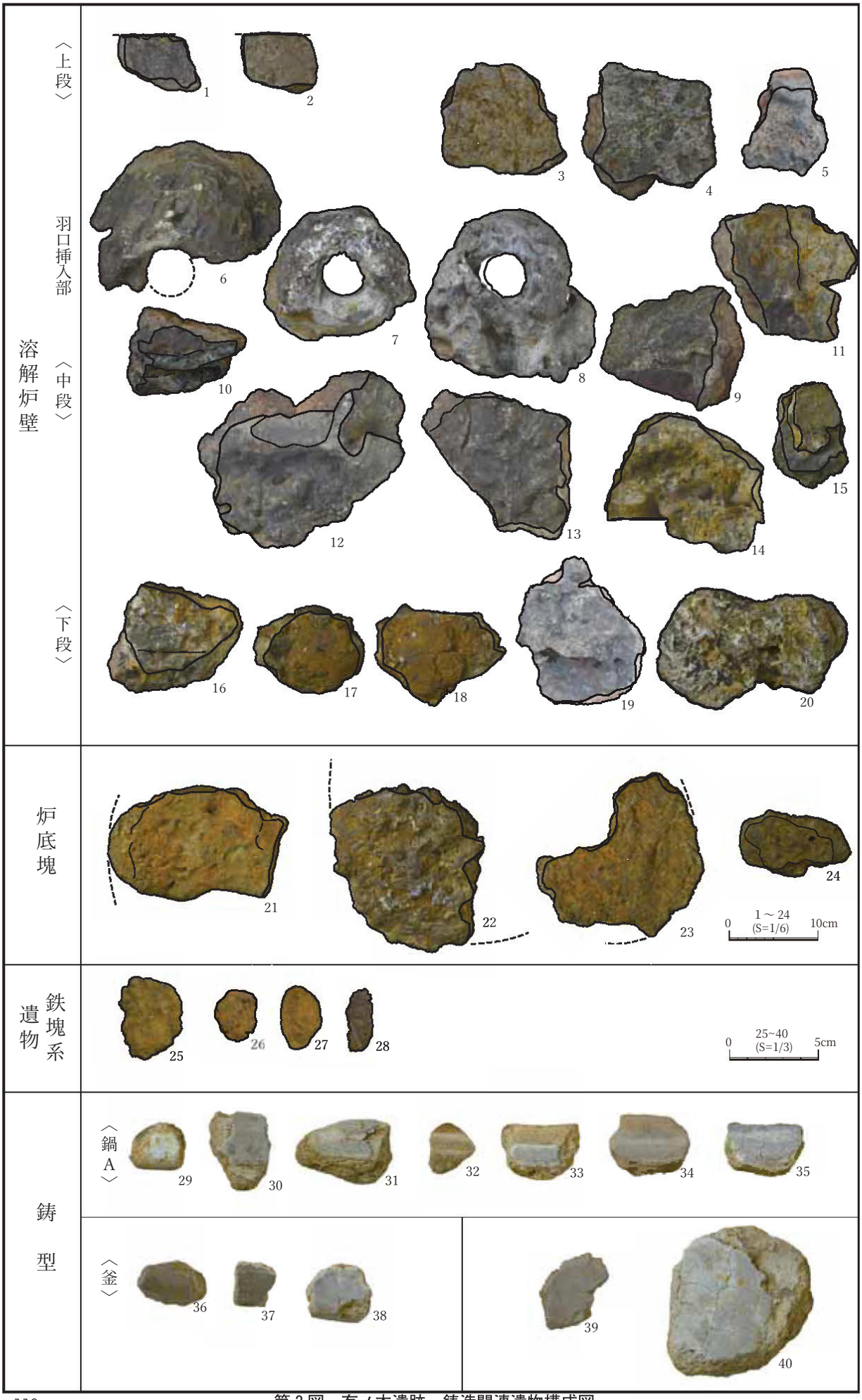
炉内に送風する羽口は俯角45°ほどの比較的急角度で炉内に挿入されている。羽口内径は６㎝ほどで鍛冶羽口に比べれば大口径であるが、溶解炉としては小振りな方である。炉の規模は資料№20から内径30㎝程度とみられ、山辺遺跡のもの（第2図2）と近い規模が想定される。

鋳型は小片ばかりで製品の内容が判然としないが、口縁部に蓋受けの屈曲をつける鍋（五十川伸矢氏の分類(9)により、以下「鍋A」とする）の鋳型を複数確認できる（資料№29～35）。また不確実ながら、鍔を廻らせ突条線を施した羽釜の可能性をもつ鋳型片（資料№36～38）も含まれる。以上のことから、鍋Aを中心的な製品としつつ、それ以外のバリエーションとなる釜類も一定量鋳造していた遺跡と評価しうる。

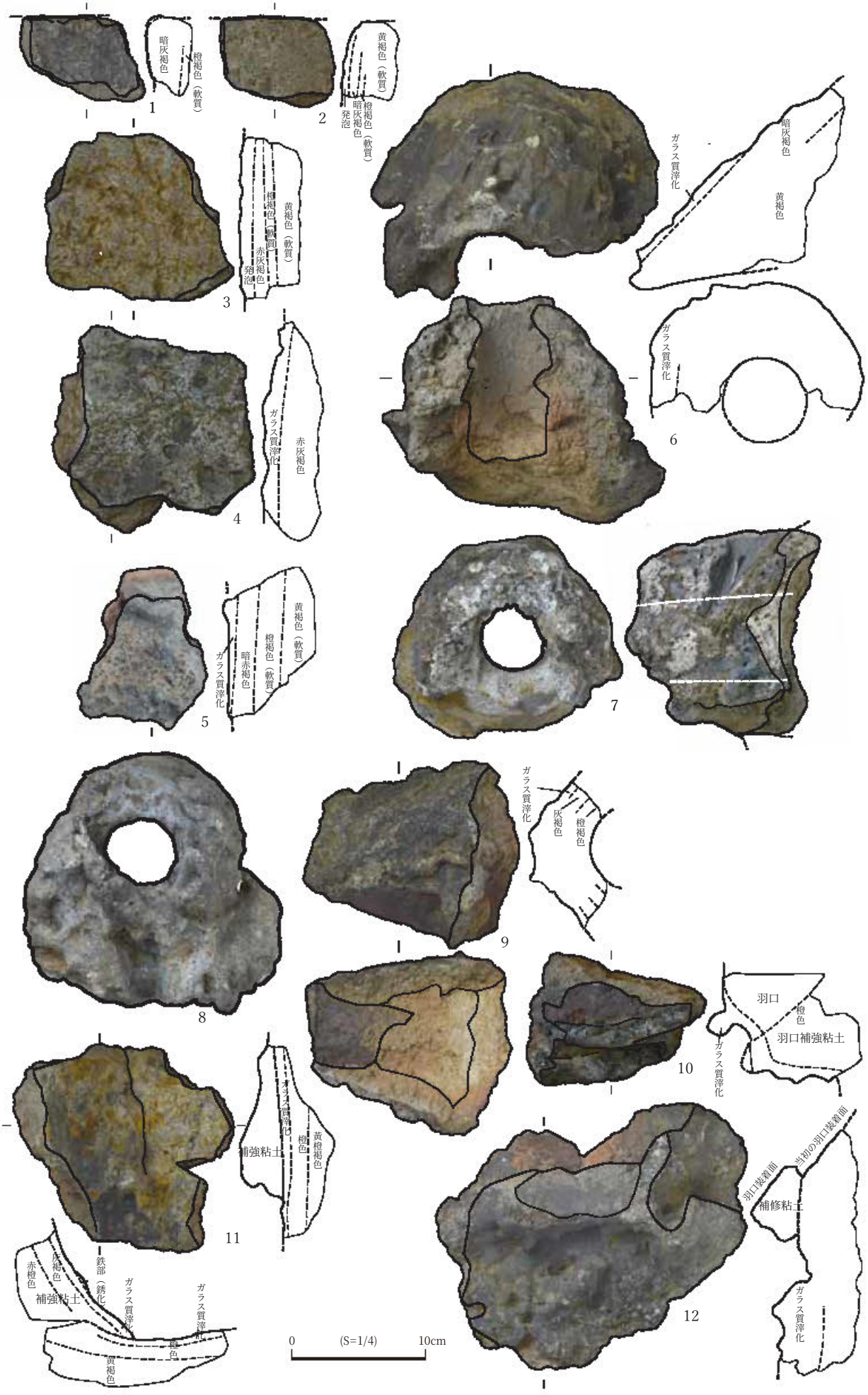
有ノ木遺跡の時期　発掘調査では５～９世紀の土器類が共伴しているが、これらは前述のとおり二次的な包含層中での混在であり、溶解炉の年代を示すとは考えられない。鋳造関連遺物から直接時期をうか

第２表　有ノ木遺跡　鋳造関連遺物観察表

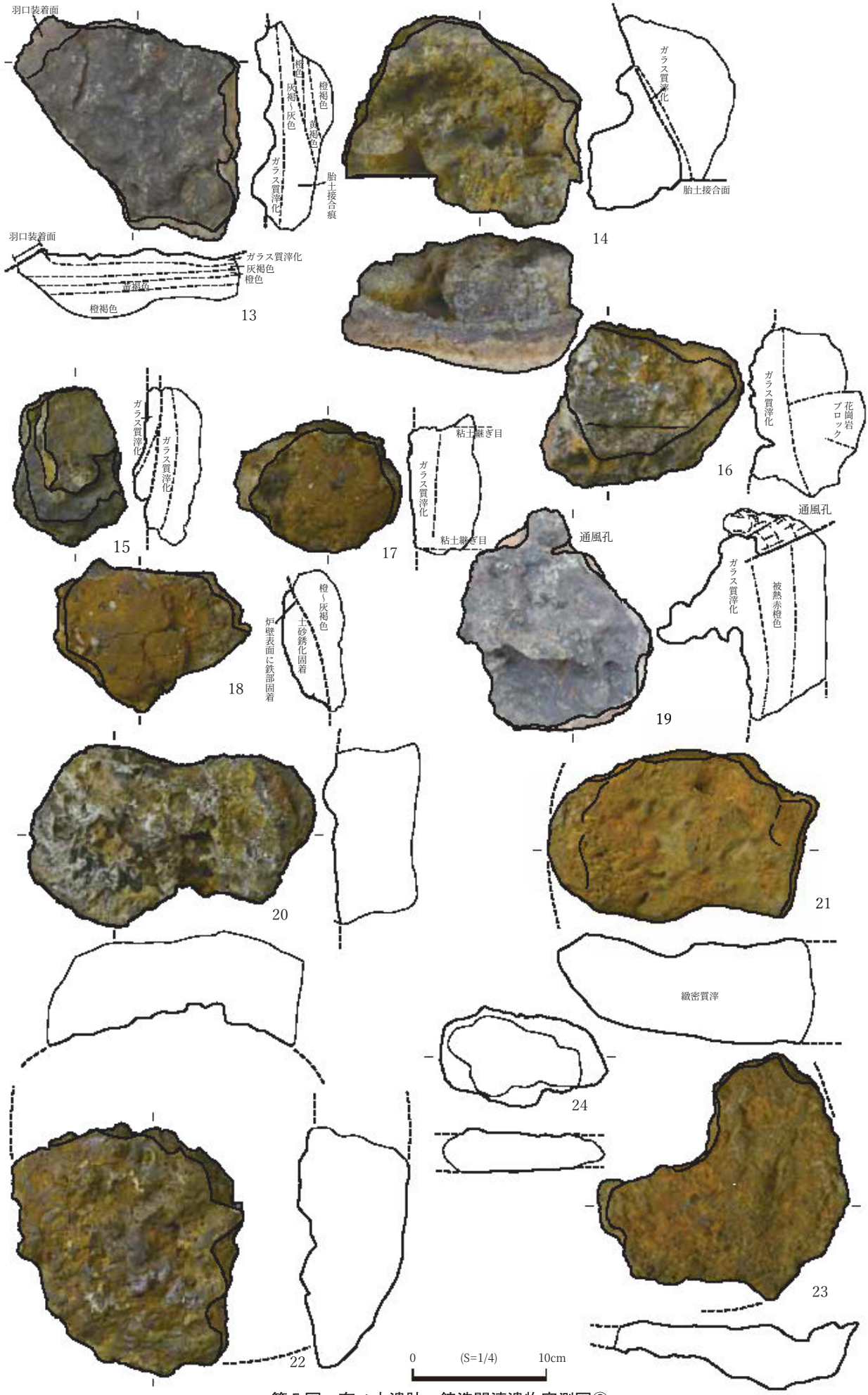
No.	種別	部位	特徴	出土地点等 注記事項
1	溶解炉壁	上段上端	上面が溶解炉上端面でイキ。内面は上端まで黒色ガラス化。外面側は被熱弱く軟質で溶ける。厚さ3.5㎝残存。曲率不明。	Ⅱ-B-4／Ⅱ層一括／96.12.10
2	溶解炉壁	上段上端	上面が溶解炉上端面でイキ。内面は被熱発泡し一部がガラス質化。内面から１㎝厚ほど硬化し外面側は軟質。わずかに外傾しており、炉の口縁は外開きか。	Ⅱ-A-3／Ⅱ層／96.12.13
3	溶解炉壁	上段	上面は破面だが内面の被熱発泡の状況はNo.2とよく似ており上段の炉壁とみられる。厚さ4cm強。外面側は軟質。平面形曲率は極めて弱く直線的。	Ⅱ-A-1／Ⅱ層一括／96.12.16
4	溶解炉壁	上段	No.2より内面のガラス質滓化が強く、全体に被熱も強く赤灰褐色を呈することから、上段でも下半寄りの炉壁とみられる。	Ⅰ-B-4／Ⅴ層　No.13／97.01.17
5	溶解炉壁	中段上方か	上面は粘土ブロック接合痕の可能性あり。中段上位相当の被熱程度であるが、接合面と内面が鈍角で下段上位の可能性もある。接合痕の下には用途不明の孔があり、19と似る。	Ⅱ-B-4／Ⅱ層　No.43／96.12.13
6	溶解炉壁 （羽口）	中段 （羽口挿入部）	炉内に挿入された羽口破片。炉壁との接合剥離痕がなく、炉内への突出は長さ19㎝以上となる。口径（内径）は復元値で6.2㎝。	Ⅰ-B-4／No.15／97.01.17
7	溶解炉壁 （羽口）	中段 （羽口挿入部）	全周に炉壁との剥離痕がまわる。炉内への突出は14㎝ほど。口径は基部で6.4㎝、先端付近で5.8㎝とわずかに先細る。剥離ラインを鉛直とすれば羽口の吹き下ろし角度は45°前後となる。	第２調査区　P.31
8	溶解炉壁 （羽口）	中段 （羽口挿入部）	炉内に挿入された羽口と、接合部の溶解炉壁が一体となる。	T-15　96.2.1
9	溶解炉壁 （羽口）	中段 （羽口挿入部）	羽口の側部破片。使用後に粘土を貼り足して再利用した痕跡をもつ。口径復元値5.6㎝。	Ⅰ-B区／P24／18-1
10	溶解炉壁 （羽口）	中段 （羽口挿入部）	炉壁へ挿入された羽口下面外周の破片。再利用時に粘土を貼り足して補強した状態が認められる。通風孔内面は残存せず。	Ⅰ-B-1／Ⅳ層　No.77／97.01.14
11	溶解炉壁	中段 （羽口挿入部）	炉壁と、挿入した羽口基部を埋め補強する粘土の接合部資料。両者の胎土は籾殻を多く含み同質。炉壁の溶融面が補強粘土の下にもぐることから、補強粘土は再利用時のもの。	Ⅰ区A-3／Ⅳ層　No.6／96.11.06
12	溶解炉壁	中段 （羽口下）	羽口挿入部直下の炉壁資料。羽口装着（剥がれ）面と、羽口基部を固定する補強粘土が残る。羽口装着角は水平から下へ45°。羽口下は黒色ガラス化して強く溶融し垂れ下がる。	（ラベル無し）
13	溶解炉壁	中段（羽口下） ～下段	羽口装着面をわずかに残す。胎土接合面があり、中段部と下段部を接続する面か。接合部にはクライのような別材充填が認められない。平面形曲率が極めて弱く、直線的。	Ⅰ-3-1／Ⅳ層　No.87／97.01.14
14	溶解炉壁	中段基部	下面に平滑な接合面がある。中段基部に相当か。内面はガラス質の滓が大きく垂れ下がる。	Ⅱ区B-4／Ⅱ層1996.10～97.01
15	溶解炉壁	中段	内面に粘土を貼り足した補修痕をもつ資料。補修粘土は厚さ1㎝程度。	Ⅰ-B-1／Ⅳ層　No.64／97.01.14
16	溶解炉壁	下段	内面はガラス質化して木炭痕を残して大きく波打つ。胎土に５～８㎝大の花崗岩塊を噛み込んでいる。炉体構築時に意図的に抱かせた構造材か。	Ｔ１７／Ⅱ層　No.1／96.01.17
17	溶解炉壁	下段	内面に銹化した銑鉄が薄く付着する。上下面ともに水平方向の粘土接合面を反映しており、高さ９㎝ほどの粘土ブロック単位資料。背面には垂直方向の粘土接合面もあらわれている。	Ⅰ-B-1／Ⅳ層　No.46／97.01.14
18	溶解炉壁	下段	内面に銹化した銑鉄が薄く付着する。わずかに内湾する。	Ⅰ-B-1／Ⅳ層　No.41／97.01.14
19	溶解炉壁 （製錬炉壁）	下段か	上面に径3.0㎝の円孔の一部が残る。滓で孔の内面側はほぼ詰まる。溶融したガラス質が垂れ下がった状態で急冷硬化している点も、製錬炉の炉壁に似る。胎土は溶解炉と類似。	Ⅰ-B-1／Ⅳ層　26.27／97.01.14
20	溶解炉壁	下段	内面が内径30㎝ほどの曲面をなし、溶解炉の規模を伺わせる資料。内面は発泡し凹凸が激しい。下段とする根拠弱く、羽口下の可能性もある。粘土を貼った補修痕あり。	Ⅱ-B-4／Ⅴ層一括／97.01.17
21	炉底塊		厚さ７㎝の板状の炉底塊。気泡の少ない緻密な滓からなり、上面は徐冷されたなめらかな表面で銹化鉄が薄く乗る。側面～下面は炉底と接し、木炭痕なし、鉄部凝集なし。	Ⅲ区2　Ⅱ層うめ土No.196.11.22
22	炉底塊		鉢状のくぼみ形状を写した炉底塊。最厚部８㎝。木炭、ガラス質滓を多量に噛み込み、ガスの多い滓主体。部分的に含鉄部がまとまる。	Ⅰ-B-1／Ⅳ層　No.47　97.1.14
23	炉底塊		厚さ２～４㎝の薄く緻密な滓。平面形が炉底形状を反映している可能性があるものの、上面にガス抜け気孔の凹凸が急冷されており、製錬滓（炉外に排出された溝滓）に類似する。	Ⅰ区A-3／Ⅳ層　96.11.06
24	炉底塊（含鉄）		厚さ2.5㎝の板状で、緻密な滓主体。まとまった鉄部を噛み込み重量感がある。外周は全周破面。底面は砂粒痕。	Ⅱ-B-4／Ⅱ層　No.41　96.12.13
25	鉄塊系遺物	椀形滓か	上面はイガイガした凹凸があり細かな木炭片を噛み込む、滓主体の資料。下面が丸みを帯びた形状から、含鉄の小型椀形滓に類似する。	Ⅱ-A-3／Ⅱ層／96.11.21
25	鉄塊系遺物	銑鉄塊	全体に丸みを帯びた鉄塊で、破面はない。銑鉄塊とみられる。	Ｔ１９／Ⅱ層一括／96.02.08
26	鉄塊系遺物	銑鉄塊	表面がなめらかで全体に丸みを帯びた鉄塊。破面はない。銑鉄塊とみられる。	Ⅰ-B-3／Ⅱ層／96.11.06
28	鉄塊系遺物	銑鉄塊	細長く流れたような形状とシワを留める銑鉄塊。太さ1.3㎝ほど。	Ⅱ-A-1／Ⅱ層一括／96.12.16
29	鋳型	鍋	鉄鍋口縁屈曲部（鍋A）の外形か。上面には挽き型回転による擦痕を残す。	Ｔ１７／Ⅱ層／96.01.17
30	鋳型	鍋	口縁を屈曲させる鍋A。真土表面に挽き型擦痕を残す。	Ⅱ-A-1／Ⅱ層／96.11.28
31	鋳型	鍋	口縁を屈曲させる鍋A。真土表面に挽き型擦痕を残す。	Ⅱ-B-1／Ⅱ層／96.11.28
32	鋳型	鍋	口縁を屈曲させる鍋Aか。	Ⅱ区A／拡張区Ⅲ層／96.12.12
33	鋳型	鍋	No.32と同様。鍋Aの口縁部。	Ⅰ区B-4／Ⅲ層一括／96.11.19
34	鋳型	鍋	鍋Aの口縁部。	Ⅱ区A-1／Ⅱ層／96.12.03
35	鋳型	鍋	鍋とすれば鍋A-2の口縁端部～屈曲部。羽釜の可能性もある。	T16／95.12.14
36	鋳型	鍋・羽釜	鉄鍋体部か。凸線を鋳出した羽釜の可能性もあり。	Ⅱ-B-2／Ⅱ層／96.11.20
37	鋳型	羽釜	羽釜とすれば鍔より上部の上型か。突線あり。	T-16／No.18／96.01.25
38	鋳型	羽釜	羽釜の鍔部か。	Ⅱ-B-2／Ⅱ層　No.12／96.11.26
39	鋳型	鍋	体部。	Ⅱ-B-2／Ⅱ層　P24／96.11.26
40	鋳型	鍋	底部付近の体部。挽型による弧状の擦痕あり。	Ⅰ-B=4／Ⅲ層／96.11.28



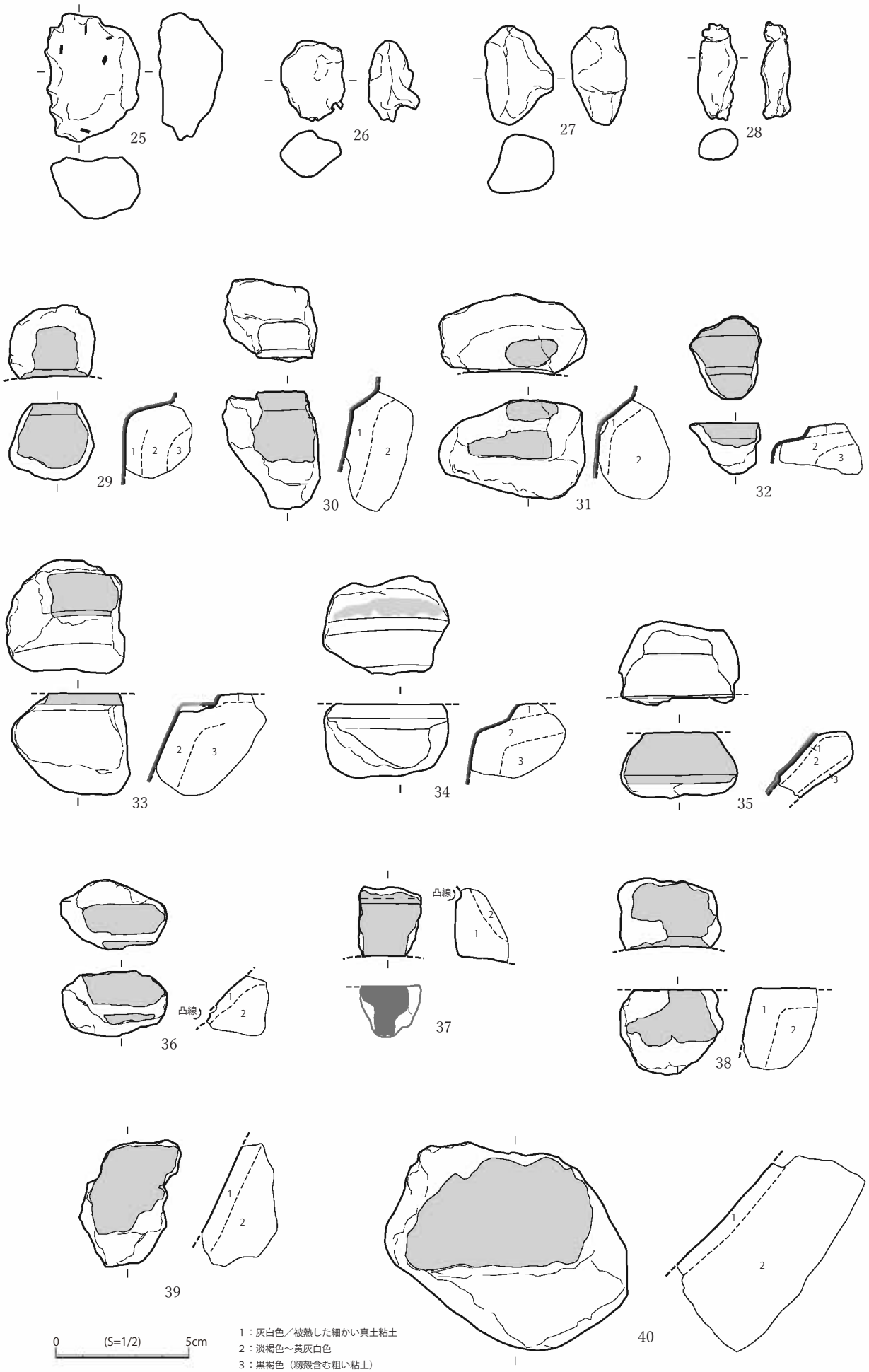
第３図　有ノ木遺跡　鋳造関連遺物構成図



第４図　有ノ木遺跡　鋳造関連遺物実測図①



第５図　有ノ木遺跡　鋳造関連遺物実測図②



第 6 図　有ノ木遺跡　鋳造関連遺物実測図③

がうことは難しいが、以下に推定を試みる。

出土した鉄鍋Aの鋳型のうち資料№29～34はいずれも口縁端部近くを２度はっきりと屈曲させて段を設けている。この段は使用時に木蓋を受けるための実用的なもので、段の上に立ち上がる口縁端部が特に短い特徴が№32,33,34から見て取れる。このように蓋受けの位置が高く口縁端部の立ち上がりが短い形態は、11世紀後半の円護寺坂ノ下遺跡（第２図10）に非常に近く、山陰に展開した鉄鍋A中でも初現様相を示すものと考えられる。次章で述べるように、県内出土の鍋Aの形態は時期が下るにつれ蓋受け位置が下方に下がり、明確な蓋受けの段を設けるもの（第３章ではＡ－１）から１箇所を屈折し外反させるもの（同じくＡ－２）へと変化していく。Ａ－１は12～14世紀にみられるが、有ノ木遺跡のようにＡ－１類のなかでも特に蓋受け位置が高いものは12世紀末～13世紀の北原本郷遺跡（雲南市木次町）に限定される。以上、鉄鍋の形態から有ノ木遺跡は12～13世紀の鋳造遺跡と推定することができる。また溶解炉の規模は同時期の山辺遺跡（第２図２）と近く違和感はない。

製鉄遺跡との関係　今回、有ノ木遺跡の出土品がすべて鉄鋳物鋳造に関わるという前提で構成を検討したが、注意を要する資料も含まれる。№19は内径３㎝の円孔があいた炉壁だが、その特徴から製錬炉（製鉄炉）の送風孔部分にあたる資料の可能性がある。また炉底塊とした№21,22,24は製錬炉の炉内滓の可能性がある。同様に№23は下面に突き起こした工具痕を残し、炉外に排出された流出溝滓と特徴が類似する。以上の点から、今回構成した資料の中には砂鉄から鉄素材を得るための製錬炉に関わる資料が含まれている可能性が高い。

これらは付近の製鉄遺跡（いわゆる野だたら）からもたらされたとみられるが、周知の遺跡としては有ノ木遺跡から南に谷を約500ｍ入った地点に位置する砂子谷たたら跡が知られている。本稿執筆者と同メンバーが実施した、たたら製鉄に関する基礎研究の中で、砂子谷たたら跡の操業年代が11世紀前半～12世紀前半とみられることを明らかにしており[10]、年代が近い製鉄遺跡が至近にあることは注意される。必ずしも同たたら跡が有ノ木遺跡と同時稼業していたとは限らないが、近隣の製鉄遺跡から有ノ木遺跡へ鉄素材が供給されていたとみて良いだろう。有ノ木遺跡から出土した銑鉄塊は、鋳造用鉄素材として実際に搬入されたものの可能性がある[11]。

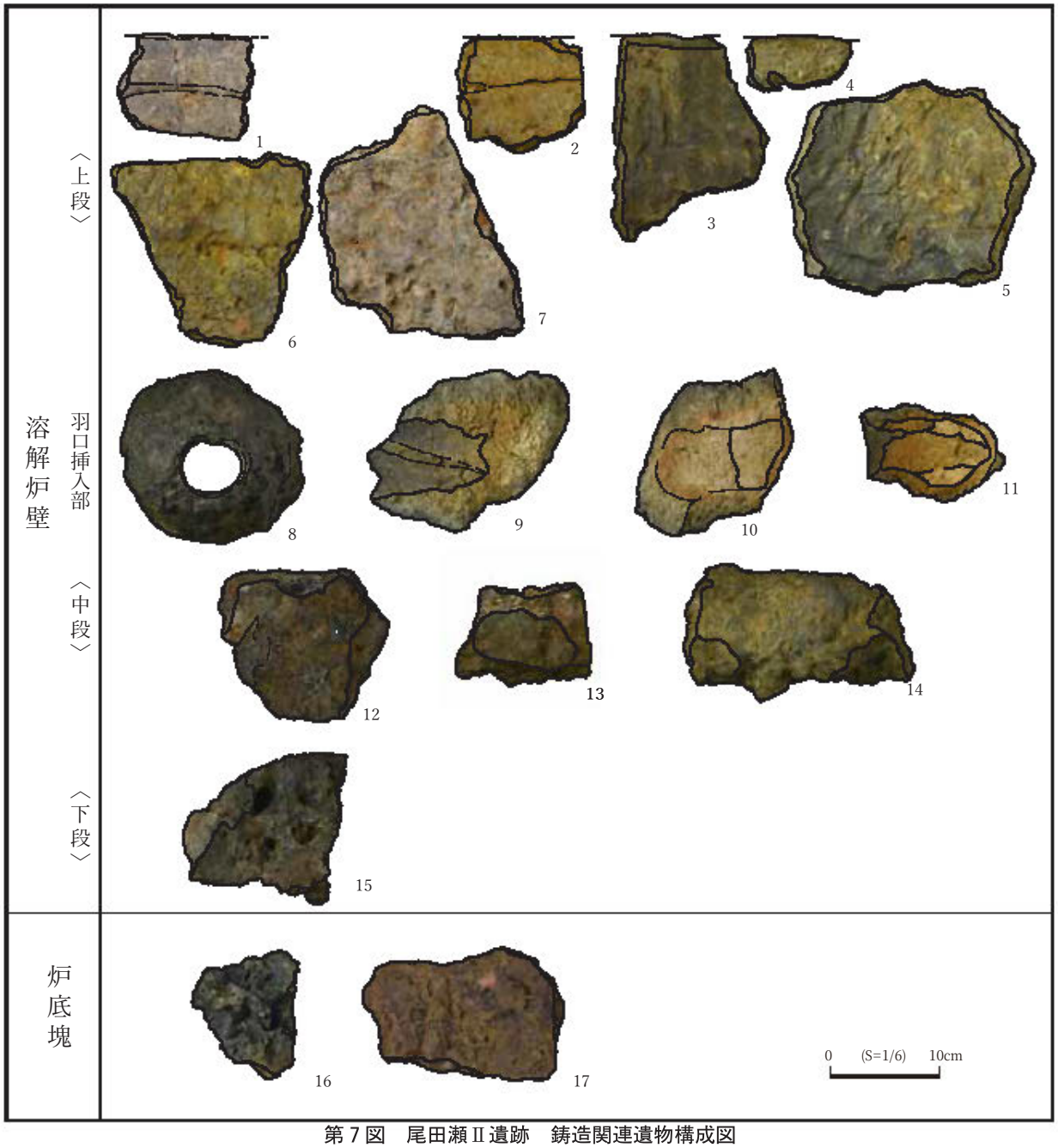
このように鉄素材供給（製錬）から鋳物の製品化（鋳造）までをひとつの谷で完結していた可能性を指摘できたことは意義深く、山陰地域に鋳鉄製煮炊具が展開し始める中世初頭頃の一つのモデルを示すことができた。古代以来の産鉄地域である出雲では14世紀以降になると、製鉄遺跡が中国山地山間部にまとまっていくが、13世紀以前は島根半島や宍道湖沿岸など臨海部にも製鉄遺跡が点在し、各地で鉄素材を生産していた。こうした平野部、臨海部における12～13世紀の製鉄遺跡展開の背景には、鋤鍬など鍛造農工具の需要拡大が想定されるが、それだけでなく鉄鍋の普及という生活様式の大転換も大きく影響していた可能性を考える必要があるだろう。

２－２．尾田瀬Ⅱ遺跡

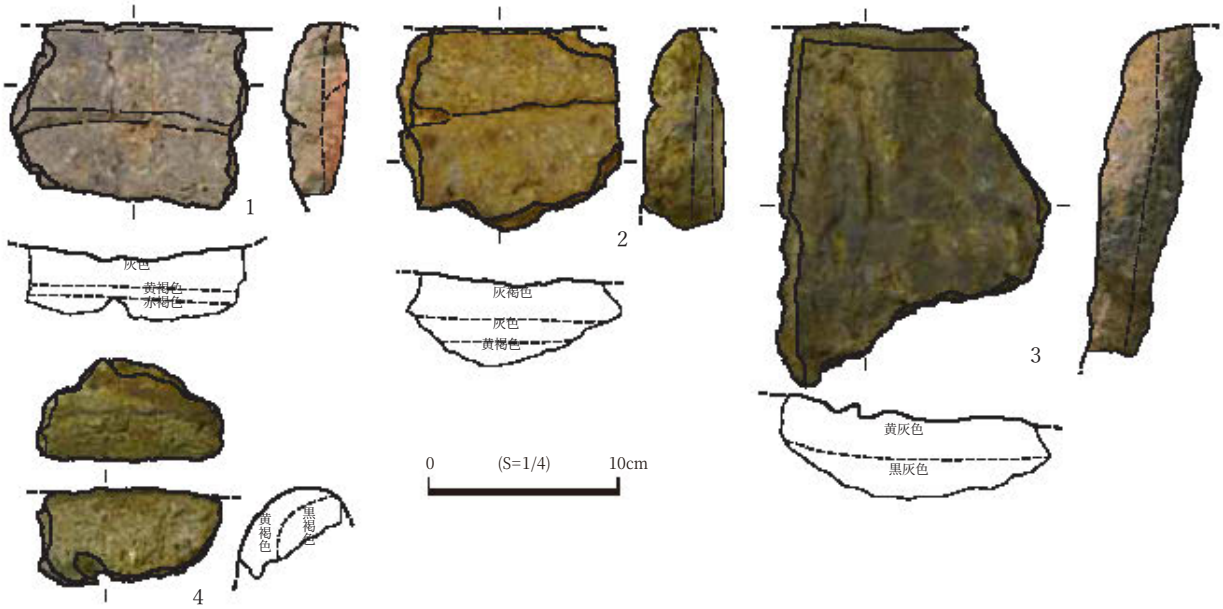
遺跡の位置　出雲市斐川町神庭に所在する。荒神谷史跡公園整備に伴い、斐川町教育委員会によって平成4・5年度に発掘調査がおこなわれた[12]。荒神谷遺跡から南に伸びる細長い谷奥部に位置しており、調査時には水田とされていた。92－５区とされる谷部の調査区に堆積した包含層から溶解炉壁がコンテナ12箱分出土している。炉自体は谷に面した丘陵斜面に存在していたとみられるが、遺構の状況は不明。

鋳造関連遺物の内容　出土品は荒神谷博物館に付随する収蔵庫で保管されており、全量を借用したうえで全点を観察検討した。その上で代表的資料17点を抽出して構成した（第７図）。溶解炉の炉壁と、炉内に残存したと推定される炉底塊からなり、保管された資料群の中に鋳型は含まれていなかった。

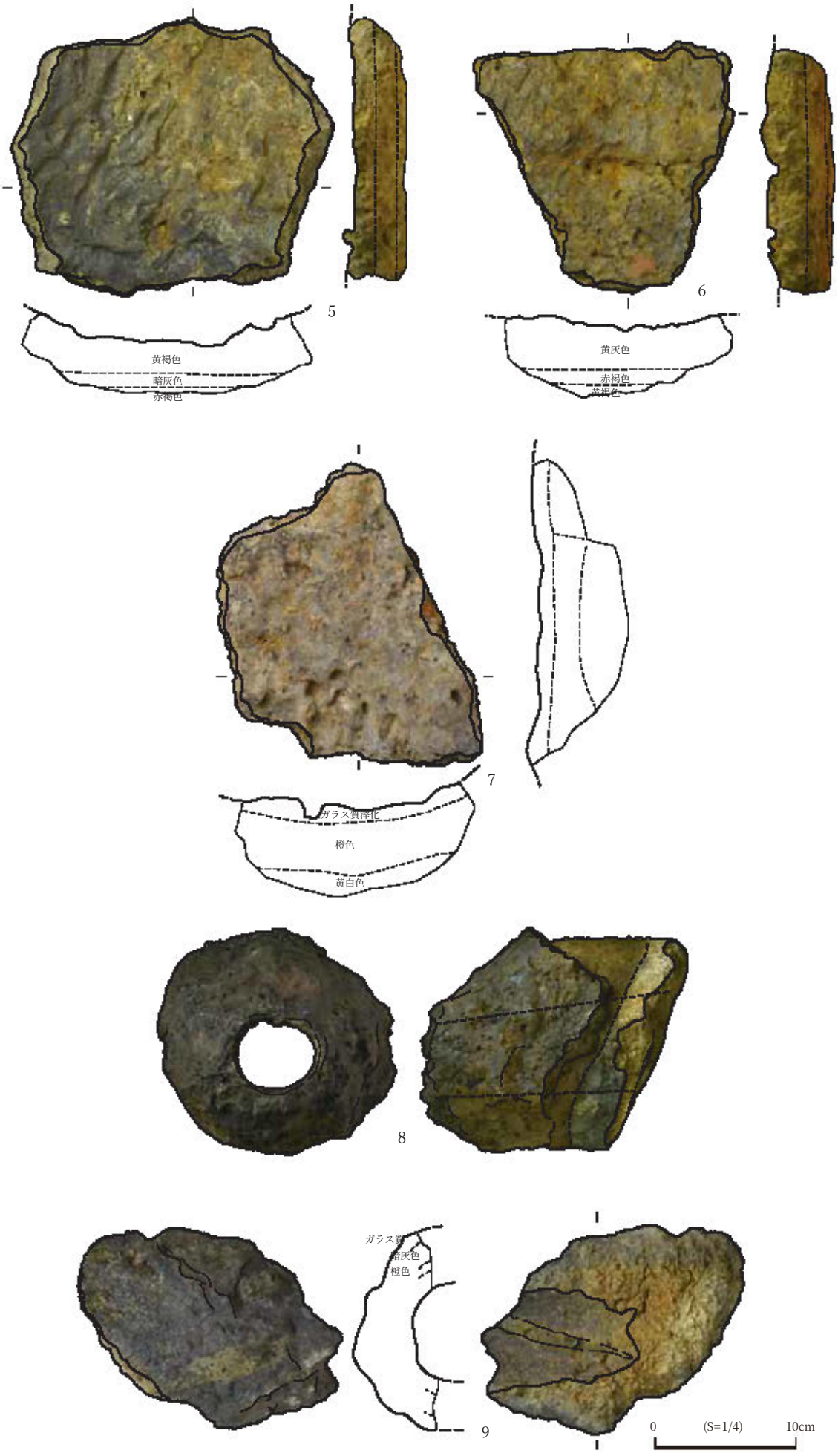
溶解炉は円筒形で中位に羽口を挿入する、一般的形態である。上段では幅5㎝前後の帯状粘土ブロックを積んで構築した接合面を残す資料がある。炉の規模は上段で内径50㎝ほど、中段寄りで内径80㎝前後と推定される。報告書では炉径50～60㎝と推定さ



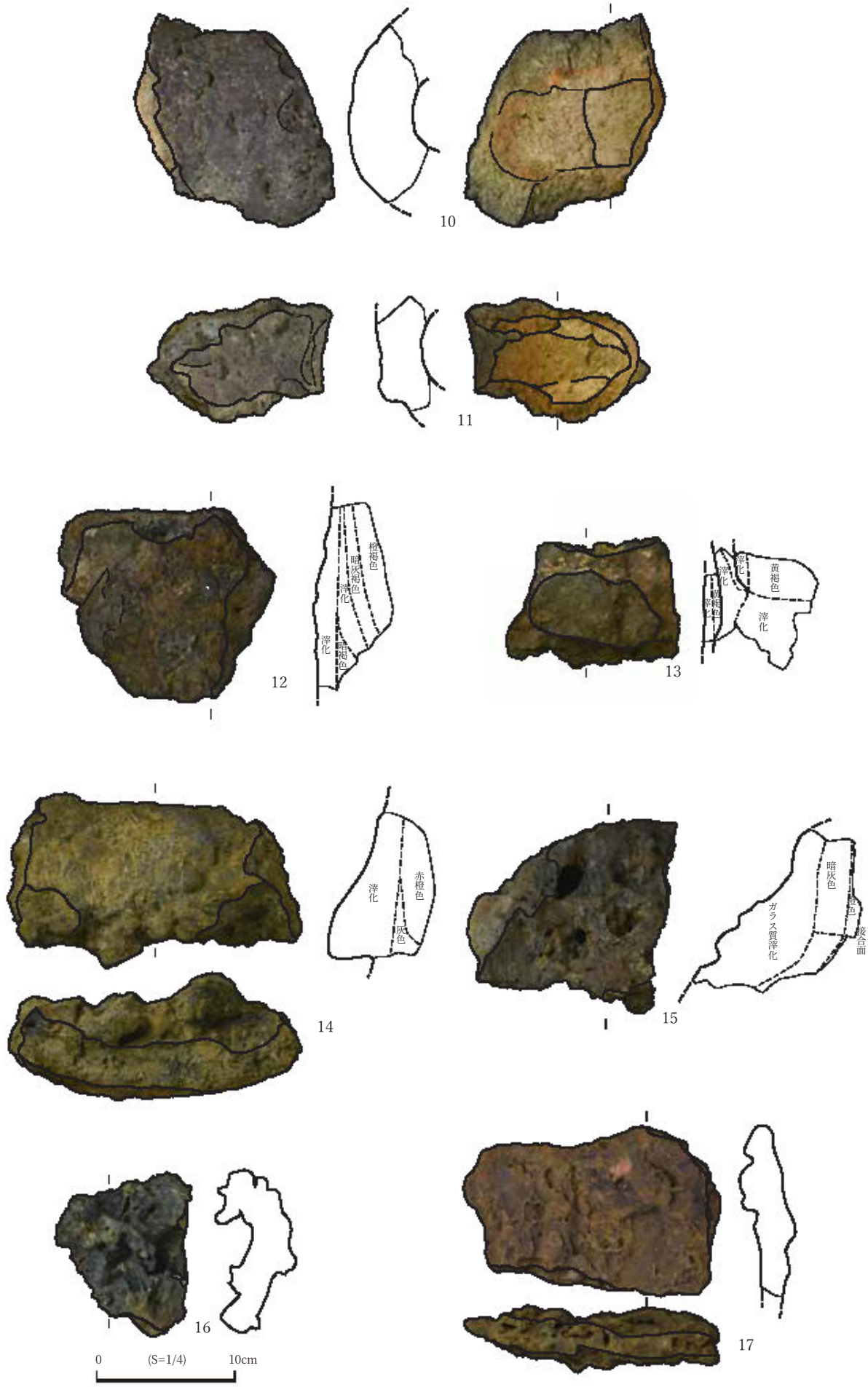
第７図　尾田瀬Ⅱ遺跡　鋳造関連遺物構成図



第８図　尾田瀬Ⅱ遺跡　鋳造関連遺物実測図①



第９図　尾田瀬Ⅱ遺跡　鋳造関連遺物実測図②



第10図　尾田瀬Ⅱ遺跡　鋳造関連遺物実測図③

第３表　尾田瀬Ⅱ遺跡　鋳造関連遺物観察表

No.	種別	部位	特徴
1	溶解炉壁	上段上端	上面が炉上端でイキの資料。内面には水平方向に、帯状粘土塊の接合痕があらわれる。最上段の粘土帯は幅５～６㎝。内面は被熱発泡し、胎土芯は赤く参加被熱。
2	溶解炉壁	上段上端	No.1と同様の部位。粘土帯幅は４～５㎝。No.1とも、平面形は径50㎝程度のゆるやかな曲率を示す。
3	溶解炉壁	上段	炉上端から高さ20㎝分ほどの資料。内面はガラス質化して垂れ凹凸が顕著。炉口は外開きに図示したが、特に傾きを復元する根拠はなし。
4	溶解炉壁	上段上端	炉上端部の破片資料。No.１～３は上端が平面的なのに対し、本資料は丸みをもつ。内面側は端まで強めの被熱発泡。
5	溶解炉壁	上段	内面がガラス質滓化し深い皺状に垂れる。下方寄りに燃料炭痕跡があり、下半は中段に近いか。内面の曲率は径80㎝前後。
6	溶解炉壁	上段	内面は発泡し滓化しているが、胎土接合面とみられる水平方向の凹みラインがあらわれる。
7	溶解炉壁	上段	水平方向の接合痕を残す。
8	溶解炉壁（羽口）	中段（羽口挿入部）	
9	溶解炉壁（羽口）	中段（羽口挿入部）	炉内に挿入された羽口破片。口径（内径）復元値8.2㎝。熔損し、先細りとなる。
10	溶解炉壁（羽口）	中段（羽口挿入部）	口径（内径）復元値6.6㎝、外径は17㎝前後。外面滓化は暗紫色。
11	溶解炉壁（羽口）	中段（羽口挿入部）	口径（内径）約８㎝。
12	溶解炉壁	中段	断面で滓化した面が2層見られ粘土貼り足しによる補修痕を示す。羽口取り替えに伴う補修とみれば、羽口付近の資料か。
13	溶解炉壁	中段	No.12と同様に、２度の粘土貼り足しによる補修痕がみられる。
14	溶解炉壁	中段	下面が接合痕であり、下段との継ぎ目か。内面は滓化し、下側へ厚く垂れる。
15	溶解炉壁	下段	中段と下段の接合部の資料か。中段は直立し、下段は丸い鉢状の傾斜をもつ。内面にはガラス質の熔解物が厚く付着する。
16	炉底塊		溶解炉に残存した炉壁に由来する滓の塊。噛み込んだ多量の木炭痕。下面は炉底の丸みを反映しているとみることもできる。
17	炉底塊		気泡を噛むが、緻密な滓主体の板状塊。下面はわずかに皿状か。下面に１㎝大の木炭跡あり。

れており、近い数値となる。羽口は口径８㎝前後の、比較的大口径のものが挿入される。内面に銹化した鉄が固着し、鋳鉄用の溶解炉であることが確認できる。以上の溶解炉壁はいずれも断片的な小破片資料のみであり、炉の構造・規模・操業状況等を具体的に復元するには情報が不十分である。

また、保管資料の中に鋳型類は含まれておらず、鋳造した製品の内容を検討することはできなかった。

遺跡の評価　報告書では同調査区から土師質土器・青磁片が出土したとされている。これらが溶解炉の時期を示すとは断定できないが、付近でおこなわれた鉄鋳物生産が中世のものであった可能性は高い。鋳型などはなく、具体的操業内容等を追究することはできなかった。なお、尾田瀬Ⅱ遺跡出土品の調査にあたっては、荒神谷博物館平野芳英氏、出雲市文化財課石橋紘二氏のご協力をいただいた。

第３章．島根県における中世鉄鋳物の展開

３－１．島根県内出土の鉄鋳物

第１章では島根県内の鋳造遺跡を俯瞰した。その結果、古代（８～９世紀）と中世末～近世初頭には銅鋳物を扱う遺跡数が増加するが、それらのほとんどが小規模で生産量が小さく、単発的であることを確認できた。その一方で中世には、円筒形の溶解炉を使用して連続的に鉄鋳物を鋳造する遺跡が複数認められた（第１表12～17）。これらの遺跡は鉄製鍋釜類や鋳造農具の需要に呼応して専業的に操業されたと想定され、その製品は地域的流通のなかで周辺に供給・消費されたと考えられる。

そこで本章では、消費遺跡における鉄鋳物のあり方を概観し、鋳物生産～流通に関する今後の研究への予察としたい。まず第４表には、島根県内の遺跡から出土した鉄鋳物について一覧表にまとめた。器種は圧倒的に鍋が多く、少量の釜の出土例がある。また牛馬耕に用いて中世の生産力向上につながった犁が少数認められる。

３－２．鉄鍋の形態変化と地域性

鉄鍋は日用品であり、日常的な煮炊き使用により傷みやすいうえ、破損修理を経て最終的にはスクラップ地金として再利用されたことから、一般的には遺

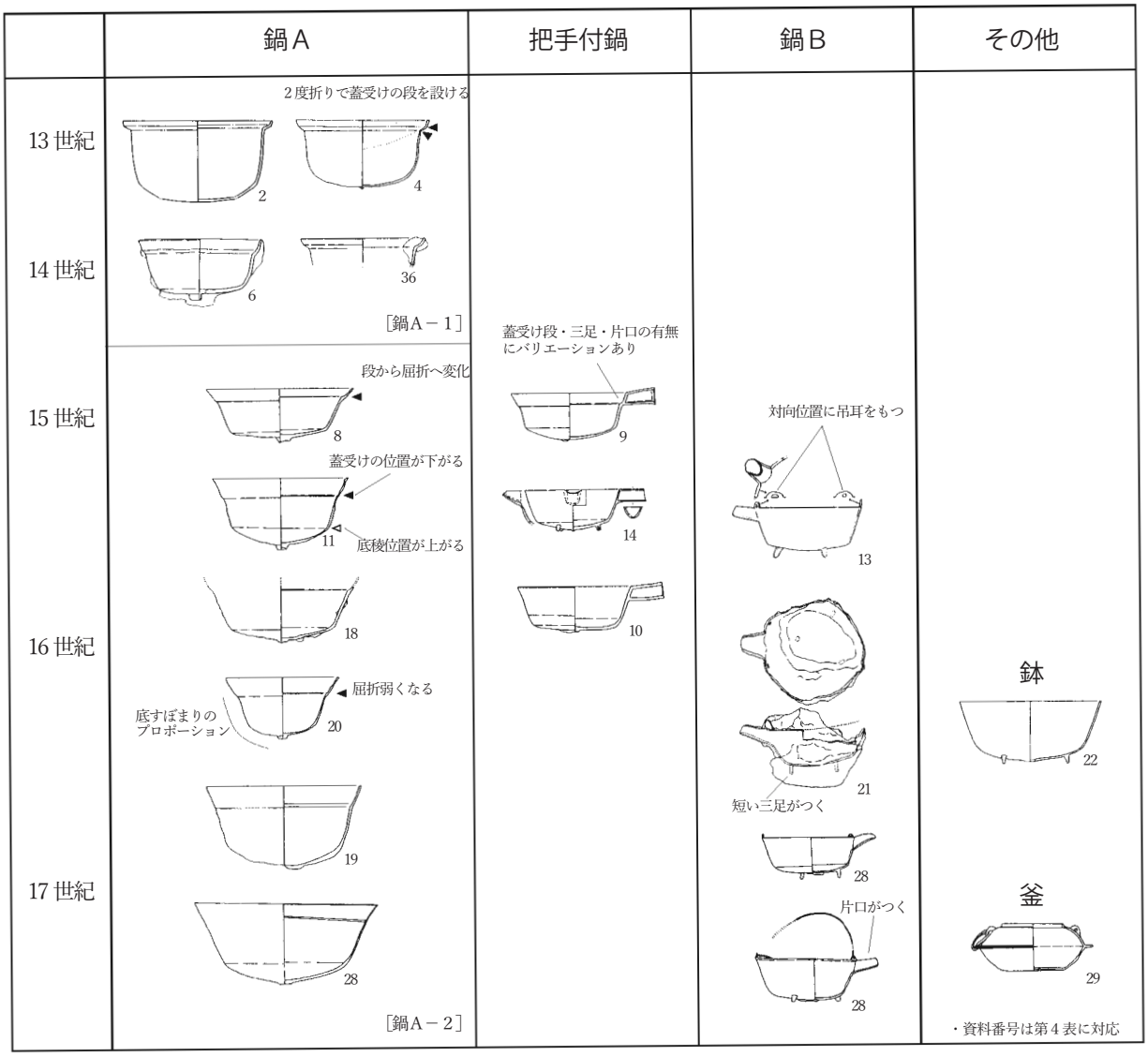
第 4 表　島根県内出土の鉄鋳物製品

番号	遺跡名	所在地	遺構名	製品	型式	点数	時期	共伴遺物	文献
1	半明遺跡	大田市長久町		犂		1	12〜13C		(1)
				鍋	A-1	1	12〜13C		
2	北原本郷遺跡	雲南市木次町		鍋	A-1	1	12末〜13C	鍛冶関連遺物 ・土師質土器	(2)
3	出雲大社境内遺跡	出雲市大社町	宇豆柱	釿		1	13C	鍛造釿・土師質土器	(3)
4	古市遺跡	浜田市下府町	SE2008	鍋	A-1	1	13C	折敷・土師質土器	(4)
5	原田遺跡7区	雲南市木次町		鍋	A-1	1	13C後半〜14C		(5)
6	福富Ⅰ遺跡	松江市乃木福富町	SB03	鍋	A-1	1	13〜14C	銭貨	(6)
7	大井谷Ⅱ遺跡	出雲市上塩冶町	大溝2	鍋	A-2	1	14〜15C		(7)
8	森Ⅴ遺跡	飯石郡飯南町	SK19	鍋	A-2	1	14〜15C	土師質土器	(8)
9			SK18	鍋	把手	1	15C前半	土師質土器	
10			SX	鍋	把手	1	15C後半	土師質土器	
11			SK09	鍋	A-2	1	15C後半	五徳・土師質土器	
12	下布施氏館跡	雲南市木次町		鍋		1	14〜16C後半	陶磁器・釘	(9)
13	矢田横穴1群	安来市矢田町	2号穴	鍋	B	1	15C後半	土師質土器・備前壺	(10)
14	板屋Ⅲ遺跡	飯石郡飯南町	SX01	鍋	把手	1	15C	鉄鎌	(11)
15	大年ノ元遺跡	益田市美都町	竪穴遺構	鍋		1	15C後半〜16C	陶磁器	(12)
16	静間城跡	大田市静間町	主郭2	釜蓋		1	15C後葉 〜16C前葉	陶磁器・銭貨・鉄製品	(13)
17	普源田城跡	浜田市三隅町	段2	鍋		1	16C前半	陶磁器	(14)
18	古志本郷遺跡	出雲市古志町	SX01	鍋	A-2	1	16C以降	土師質土器	(15)
19	森Ⅴ遺跡	飯石郡飯南町	SK10	鍋	A-2	1	16C以降	五徳・土師質土器	(8)
20	森Ⅴ遺跡	飯石郡飯南町	SK07	鍋	A-2	1	16C以降	土師質土器	
21	石見銀山遺跡 藤田地区	大田市大森町	SB01 坑口前	鍋	B	2	16C後半	火箸・陶磁器	(16)
22	清水荒神塚遺跡	雲南市三刀屋町	埋納坑	鉢		1	16C〜17C前半	土師質土器	(17)
23	殿屋敷遺跡	益田市匹見町	遺構外	鍋		2	中世		(18)
24	大歳遺跡	雲南市木次町		鍋	A-2	1	中世	銭貨	(19)
25	広瀬	益田市匹見町		犂		2	室町末以降	槍・鏃・兜	(20)
26	富田川河床遺跡	安来市広瀬町	SB024	犂		1	17世紀中葉	陶磁器・錘・銭貨・小柄 ・小刀・刀子・硯	(21)
27				ヘラ		2			
28			SB031	鍋	B	4		陶磁器・小柄・鎌・鉈 ・錠前・銭貨	
29				釜		1			
30	青木遺跡	出雲市東林木町		鍋	他	1			(22)
31	下山遺跡	飯石郡飯南町		鍋	A-2	1			(23)
32	馬場遺跡	雲南市三刀屋町	河道 2	鍋		2	12世紀か		(24)
33	西ノ平遺跡	雲南市木次町	C17号墓	鍋	B	1	近世	煙管	(25)
34	小池古墳群	仁多郡奥出雲町	横穴墓前庭	鍋		1			(26)
35	崎前遺跡	仁多郡奥出雲町		鍋	A-2	1		土師質土器	(27)
36	宮ノ前遺跡	松江市玉湯町		鍋	A-1	1			(28)
37	石見銀山遺跡 竹田地区	大田市大森町		鍋		1			(29)
38	古八幡遺跡	江津市		羽釜		1			(30)

【第 4 表出典文献】

(1)島根県教育委員会2021『半明遺跡』／(2)島根県教育委員会2005『北原本郷遺跡 1 』／(3)出雲大社2018『出雲大社境内遺跡出土品保存修理報告書』／(4)浜田市教育委員会1995『古市遺跡発掘調査概報』 榊原博英2001「浜田・古市遺跡における中世前半の土器について」『松江考古』第 9 号／(5)島根県教育委員会2007『原田遺跡(3)』／(6)島根県教育委員会1997『福富Ⅰ遺跡・尾形1号墳』／(7)出雲市教育委員会2001『斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ』／(8)頓原町教育委員会2001『森Ⅴ遺跡』／(9)2002年木次町教育委員会調査／(10)島根県教育委員会1969『島根県埋蔵文化財調査報告書』第 1 集／(11)島根県教育委員会2003『板屋Ⅲ遺跡(2)』／(12)2002年美都町教育委員会調査／(13)島根県教育委員会2018『静間城跡』／(14)2018年島根県教育委員会発掘調査／(15)島根県教育委員会2001『古志本郷遺跡Ⅱ』／(16)大田市・島根県教育委員会1999『石見銀山遺跡発掘調査報告Ⅰ』／(17)三刀屋町教育委員会1976『殿河内遺跡発掘調査報告書』／(18)匹見町教育委員会1999『戦国時代の殿屋敷遺跡』／(19)三宅博士1985「土師質土器を伴う石鉢について」『島根考古学会誌』第2集／(20)木下忠1977「島根県匹見町広瀬出土の犂先の再検討」『考古論集』松崎寿和先生退官記念事業会／(21)島根県教育委員会1983『富田川河床遺跡発掘調査報告書Ⅲ』／(22)島根県教育委員会2004『青木遺跡(中近世編)』／(23)島根県教育委員会2000『下山遺跡(1)』／(24)島根県教育委員会2001『馬場遺跡』／(25)雲南市教育委員会2005『西ノ平遺跡・コフケ遺跡』／(26)横田町教育委員会1992『島根県仁多郡横田町町内遺跡詳細分布調

査報告書Ⅰ』／㉗仁多町教育委員会1994『日ヤケたたら跡・芝原遺跡』／㉘島根県教育委員会2006『県道浜乃木湯町線（湯町工区）建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』／㉙大田市・島根県教育委員会2005『石見銀山遺跡発掘調査報告Ⅱ』／㉚島根県教育委員会2000『神主城跡・室崎商店裏遺跡・古八幡遺跡・横路古墓』



第11図　島根県内出土の鉄鍋・釜類

跡から出土しにくいものである。東日本では鉄鍋を被せて埋葬する「鍋被り葬」の調査事例が多く確認されているが、そのように人為的に埋めない限りは鉄鍋が遺跡から出土することは少ない。本県内の事例も同様で、井戸や土坑にまじないとして鎮め埋納された状態で出土する事例が多い。

全国的な鉄鍋のバリエーションや変遷過程については五十川伸矢氏の総合的研究があり[13]、それを踏まえて島根県内の出土事例に関する検討もおこなわれている[14]。これらを参考にしながら、島根県内出土の鉄鍋についてあらためて検討をくわえ、第11図に整理して概況を述べる。

島根県内では12～13世紀に鍋Aの生産・流通が始まった。鍋A・B・Cの名称は前述の五十川氏による大別分類で、このうち鍋Aとは口縁を屈曲させることで蓋を受ける段を造り出すものである。県内では北原本郷遺跡（第11図2／12世紀末～13世紀）、古市遺跡（第11図4／13世紀）が初期のもので、口縁をシャープに2度屈折させ、短い端部がまっすぐ上方へ立ち上がることが特徴である。また蓋受け段

の位置は高い位置にある。このタイプを本稿では鍋A－１とする。こうした初期鉄鍋の生産地、すなわち地方生産がいつ開始されるかという問題があるが、鳥取県では11世紀後半とされる円護寺坂ノ下遺跡（第２図10）で、また島根県内では前章で述べたように有ノ木遺跡から鍋A－１の鋳型が出土していることから、全国的に鉄鍋が地方へ展開し始める12世紀にはすでに山陰でも鉄鍋A－１の鋳造が開始し、地域内に供給されていたと考えられる。このように中世の鋳鉄煮炊具としてまず鍋Aが展開するのは西日本の一般的あり方とみられており、今回の検討で山陰もそれと整合的であることが確認できた。

12～14世紀の間は鉄鍋Aしかみられず、古代的な釜や東日本で展開する鍋C（口縁内側に吊すための耳がつくもの。内耳鍋）などのバリエーションは認められないが、15世紀以降、鍋Aの変化とともに把手付鍋、鍋Bといった別形式のものが現れる。

15世紀以降も鍋Aが煮炊具の主流であることは変わりないが、その形態は変化する。まず蓋受けの段が外反させるような屈折に変化し、その位置が口縁から下方へ下がっていく。またプロポーションは平底から丸底（尖底）へ変化するとともに、口径に対して底径が小さい尻すぼみとなっていく。こうした変化は15世紀後半には認められ、17世紀まで継続するもので、土器鍋の変化に対応した全国的な動態と共通するものである。

把手付鍋は出土例が少なく今のところ15世紀の飯石郡飯南町周辺に限られている。把手以外の特徴が鍋Aと共通するもの（第11図９）以外に、三足・片口が付くもの（同14）や、蓋受けが無く平底のもの（同10）があり個体差が大きい。鍋Bの影響を受けた地域性の強いタイプの可能性がある。

鍋Bは弦を付けるための吊耳を口縁に鋳出したもので、全国的に15世紀になって展開する。本県内では15世紀後半以降に確認できる。短い三足がつくのは全国的にみられる鍋Bの特徴だが、本県内の資料はすべてに片口がつく点が特徴的である（他地域では片口のない鍋Bも展開しているが、本県ではみられない）。当地域では鍋A（口・足なし）と鍋B（弦・片口・三足あり）が機能用途面で明確に区別され、生産段階から作り分けられていた可能性が考えられる。

以上みてきた中世鉄鍋の様相は、既に言われている西日本全般のあり方と齟齬するものでないが、今回の検討によって初めて生産遺跡と関連づけながら全体像を描くことができた。繰り返しになるが整理すると、①全国的に鉄鍋の使用と地方生産が展開する12世紀頃には島根県内でも鋳造が開始しており、遺跡としては山辺遺跡（第１表12）と有ノ木遺跡（同13）がその段階のもの。鉄鍋A－１のみを生産・使用している。②15世紀には鍋Bが広まり、鍋Aと区別しながら17世紀まで生産・使用が継続される。やや異種のものとして把手付鍋が現れるなどバリエーションが見られるとともに出土例全体も増加することから、鋳物工房も拡大したと予想される。益田エリアの鋳造遺跡はこの段階のもの、また内容不明ながら尾田瀬Ⅱ遺跡、クボ山遺跡もその可能性があり、中世後半には各地に鋳物工房が展開し、地域需要を支えていたと考えられる。

第４章. ま と め

本稿では、島根県内で確認されている鋳造遺跡31例を集成したうえで、時期別にその内容を検討した。その結果、８～９世紀には出雲地域の官衙・寺院関連遺跡や官営的な鍛冶工房などで小規模な銅鋳物生産が盛んにおこなわれるが、全国的な動向とも同調しつつ10～15世紀は鋳銅自体が低調になること、16～17世紀になると城下町や港湾など大消費地や流通上の拠点付近で小規模点在的に銅鋳物が生産されていること、が確認できた。こうした銅鋳物生産は鍛冶や漆工など多種の手工業品生産と複合しており、鋳銅だけに専門的に特化した形態はみられない。一方、山陰でも12世紀頃には日用煮炊具である鋳造鉄鍋の専業的生産が開始していることが鋳造遺跡から確認され、以降中世を通じて多量に消費される地域内需要を支えていたことが確認できた。これは消費遺跡の鍋類の出土動向からも整合的に認められ、個別器種の展開はおおむね西日本の一般的傾向と合致

する。

また、宍道湖沿岸部の有ノ木遺跡の再検討からは、12～13世紀頃に製錬（たたら製鉄）による素材生産と、隣接地での鉄鍋鋳造までが一環して行われていた可能性が指摘できた。鉄産地である出雲では14世紀になると製鉄遺跡が中国山地山間部に集積していくが、それ以前の製鉄と鋳物供給の関係性についてひとつの生産モデルを提示することができた。

島根県内では中世以前の梵鐘生産など大型品鋳造に関する遺跡は知られておらず、いわゆる出吹きの事例である隠岐国分寺の梵鐘鋳造遺構（18世紀）があるだけである。これを除くと近世を通じて鋳造遺跡自体が見られなくなるが、これは松江藩釜甑方や特権的地位を認められた出雲・石見の鋳物師集団による拠点的・集約的な鋳物生産が背景にあることが推定できた。

以上を鋳造遺跡に関する基礎的研究のまとめとし、今後の研究深化に期したい。

【註】

（1）五十川伸矢2002「Ⅳ　銅と鉄の鋳造」『鉄と銅の生産の歴史　古代から近世初頭にいたる』佐々木稔編著、雄山閣

（2）金属学的分析の結果をまとめた報告書では年代が８～13世紀と幅がもたせてある。その根拠は示されていないが、分析試料のうち１点が12～13世紀の砂鉄製錬滓と報告されており、溶解炉がこの時期のもので製鉄炉に近接し鉄鋳物を鋳造していた可能性を想定したものとみられる。

（3）佐々木稔2002「3　銅生産の開始・衰退・再活発化と各段階の技術的様相」『鉄と銅の生産の歴史　古代から近世初頭にいたる』佐々木稔編著、雄山閣

（4）財団法人鳥取市教育福祉振興会2000『円護寺坂ノ下遺跡　円護寺住宅団地造成に係る発掘調査報告書』

（5）伯耆町教育委員会2013『三部古城山遺跡発掘調査報告書　三部福屋ノ奥谷川砂防堰堤建設工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』

（6）註（3）文献

（7）鳥取県教育文化財団2001『霞遺跡群』

（8）玉湯町教育委員会1997『別所地区地すべり関連区画整理事業に伴う有ノ木遺跡発掘調査報告書』

（9）五十川伸矢1992「古代・中世の鋳鉄鋳物」『国立歴史民俗博物館研究報告』第46集

（10）採取した木炭片のAMS年代測定による、1σ暦年代。東山信治2020「出雲地方沿岸部の製鉄遺跡－宍道湖南岸域及び島根半島を中心に－」『たたら製鉄の成立過程』島根県古代文化センター研究論集第24集

（11）銑鉄塊のうち溶解炉壁から剝がれた資料№28は鋳造作業に伴うものだが、№26,27は溶解炉で生成したと考えにくく、同時期の製鉄遺跡から出土するものに様態が良く似ている。

（12）斐川町教育委員会1999『荒神谷史跡公園整備に伴う尾田瀬II・西谷II・西谷遺跡発掘調査報告書』

（13）註（9）文献

（14）原田敏照編2003『板屋Ⅲ遺跡（2）』島根県教育委員会／熱田貴保・守岡正司ほか編2007『原田遺跡（3）』島根県教育委員会